

初音島の悪虐皇帝

帰ってきた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゼロレクイエムにより自身のシナリオ通りに死亡したルルーシユは初音島でルルーシユ・ヴィ・ブリタニアではなくルルーシユ・ランペルージとして新たな人生を歩むこととなった。

ハーメルンから暁で投稿していましたが機種変の際に暁のアカウントにログインできなくなってしまい再びハーメルンに戻ってきました。内容は暁のものを使用しています。

意見感想、アドバイスや誤字脱字の指摘などよろしくお願いします。

以前ハーメルンでは嵐の中輝きたいと言う名前で小説を投稿してました。タイトルもコードギアス初音島のルルーシユから変更しました。

目次

初音島	1
To you 雪月花	
悪虐皇帝と生徒会	5
悪虐皇帝と出会い	10
悪虐皇帝と鈍感少年	14
悪虐皇帝と幼馴染たち	20
悪虐皇帝と最強問題児	25
悪虐皇帝と集う問題児たち	30
悪虐皇帝と下準備	37
悪虐皇帝と本番当日	44
悪虐皇帝と企て	51
悪虐皇帝と打ち上げ花火	59
春風のアルティメットバトル	
悪虐皇帝と卒業パーティー	70
悪虐皇帝と一悶着	76
悪虐皇帝と小ハプニング	82
悪虐皇帝と実行	92
悪虐皇帝と幕引き	96
悪虐皇帝とエピソード①	104
悪虐皇帝とエピソード②	110
原作本編	
悪逆皇帝と出店物の行方	114
悪虐皇帝と少女	122

悪逆皇帝と賢妹？	129
悪虐皇帝と留学生	135
悪虐皇帝と怪事件と	142
悪虐皇帝とクリパ準備	149
悪逆皇帝の知らぬところで	154
番外編	
風見学園演劇部の名作	前編
風見学園演劇部の名作	後編
	164
	175

初音島

初音島、本島から橋一本で繋がっている離島で本島との行き来は橋と船の二つである。交通の便が中々不便なところもあるがそんな初音島には年間多くの人が訪れている。

その大きな理由は一つ、初音島には枯れない桜と呼ばれる桜の樹があるからだ。

いつの頃からは定かではないが初音島に突如枯れない桜が咲き始めた、咲き始めた当初は世界各国あらゆる植物学者や研究機関がその調査に乗り出した。

しかし、あらゆる調査を行っても原因は不明。当時の最先端の技術を用いても原因を全く突き止めることができず多くの研究者が頭を悩ませたそうだ。

そんな桜の樹も過去に二度枯れたことがあるらしい。桜が枯れた当初はかなりの話題となったそうだ、枯れた当初も多くの学者がその原因を突き止めようとしたが結局は50年近く経った今でもわかっていない。

そんなことが行われていた中桜の樹に関して一つの噂が流れていた。

枯れない桜は魔法の桜、という噂だ。きっかけは定かではないが主だった理由としては桜の樹に願い事をした人物の願いが実際に叶ったかららしく。

多くの人がその噂を聞きつけこぞって桜の樹に願いをしに行くが叶ったものと叶わなかったものと別れた。

ロボット技術が発達する中で魔法などという非科学的なことを普通の人ならば嘘だと一蹴するだろう。

だが、俺はそうは思わない。何故なら俺自身そういつたことを体験したからだ。不老不死の魔女C。Cから与えられたギアスという人智を超えた力。大国ブリタニアに戦いを挑み、敗れ、勝利し最後は友に討たれた。

そこで俺の人生は終わったはずであった、だが目を覚ますと俺は赤ん坊になっていたのだ。最初は驚いたが人智を超えた出来事には耐性があった為か自分でも驚くほど冷静でいれた。

だが、ファミリィネームがランペルージだったのはどこか作為的なものを感じたが。

さて、この世界で暮らしてわかったことが幾つかある。先ずはこの世界にはブリタニアは存在しない。この点は俺にとってはかなり重要な点だと言えよう。

サクラダイトも存在は確認されていない、富士山の地中にあるが、まだ発掘されていないだけであるかもしれないが願わくは発掘されないことを祈る。

さて、一番の問題は俺にギアスが宿っていることだ、しかも両目だ。最初は慌てたがギアスのONOFFはできたため大事には至らなかったが肝を冷やした。

まあ、一度だけギアスを使用したけど問題はないだろう。

この世界に生まれて早十数年、嘗てと比べて平和な日常を送ってい

る。

そして季節は春、春は出会いと別れの季節だと言われているがこの初音島には小学校は数校あれど中学高校は一つ。中高一貫校である風見学園である。

開校してから既に半世紀以上でイベント行事も多く、生徒の自主性を重んじる校風と相まって本島から態々編入してくる生徒も多い。

そんな風見学園に今日入学する俺は満開の桜並木を幼馴染と悪友の二人と並んで歩いていた。

「いや〜今日から私たちも風見学園の一員になるんだねえ〜。」

「そうね、風見学園はイベントが目白押しだし悪巧みのしがいがありそうね」

「そうだな、今までは張り合いのある相手がいなかったからな。物足りなければこちらの方もやる気が出ないしな」

「うわ〜、杏ちゃんもルル君も物凄い悪い顔してる。」

「あら、茜だって本当は期待してるくせに」

「あらら？バレちゃった？」

花咲 茜【はなさき あかね】俺の幼馴染で幼少の頃からの付き合いで薄い桃色の髪に13歳と思えない程のプロポーションを誇っている。二年ほど前から急激な成長を遂げ周囲から驚かされていた。

そしてもう一人は雪村 杏【ゆきむら あんず】小学生の頃に本島

からやって来た転校生で転校当初はあまり目立たなかったそうだがある日突然今ののような性格になっていたようだ。

茜から杏を紹介されそこから交流が始まり、それがきっかけで俺たちは三人でいることが多くなった。

それからというもの俺たちはイベント毎に騒動を起こすようになっていつの間にか周囲から悪童と呼ばれるようになった。

色々あったが俺は今のこの何気ない日常に満足している、そして、これからまた新しい日々が始まる。その新しい日々はどこか今までにない期待を抱きながら俺は桜並木を歩くのだった。

T o y o u 雪月花

悪虐皇帝と生徒会

風見学園に入学して新しい環境に慣れ始めた頃、俺はある調査を進めていた。

近々スポーツテストが行われる為か校内はその話題がちらほら聞こえてくる。俺もこの風見学園での生活に慣れたのでそろそろ事を起こそうと考えた。

そのイベントが先程言ったスポーツテストである。体育祭や文化祭と比べては小さなことであるがその二つのイベントの為のウォーミングアップにはなるだろう。

スポーツテストで事を起こすにあたり先に接触しておきたい集団がいる、この風見学園創設とほぼ同じ時期に結成された非公式の部活にも関わらず大規模な部活。

その名も非公式新聞部、部員から部長までが誰なのか部員の数も一切分かっていない全てが謎のベールに包まれている部活動だ。

代々、風見学園のイベント時には必ずと言っていいほど事を起こしているらしい。

しかし、一方ではきちんと非公式新聞部として新聞を発行はしているようだ。俺も拝見したことはあるが殆どがオカルト関係の記事ばかりだった。

調査を始めて数日、今は付属二年の生徒を中心に調査を進めている。本来ならば付属の三年から聞き込みを行いたかったんだが付属

の三年には厄介な人物がいるため後回しにすることにしたのだ。

さて、そろそろ休み時間も終わりだ。廊下に出ている生徒も教室に戻り始めている中俺もその群衆に紛れて教室に戻ろうとしたその時だった。

「はい、ストップ」

何者かが俺の肩を掴んだのだ、いや、声を聴いただけでその人物が誰か俺には直ぐにわかった。そろそろ接触してくる頃だとは思っていたからそこまで驚きはないが。

「なんででしょうか高坂先輩？」

振り返るとそこには俺の想像通りの人物がいた。高坂 まゆき「こうさか まゆき」青紫の髪色のショートヘアー獲物を狙うかのようなキリツとした目付きによく見つけた獲物を目の前に口元は鋭い笑みを浮かべていた。

生徒会に所属している人物で陸上部の将来のエースと期待されている人物でもある。それに中々優秀な人物でもあり将来有望な人材であると周囲から高い評価を得ている。

更にもう一人高坂まゆきに負けず劣らずの人物がいるのだが今は居ないので割愛しよう。

「なんででしょう？・じゃないわよ。ルルーシユあんだ最近非公式新聞部について調べるらしいじゃない」

「ええ、そうですが。それがなにか問題でもあるのでしょうか？」

「あるわよ！特にあんたみたいな要注意人物が問題児の巣窟である非公式新聞部と接触でもしてみなさいよ、面倒事が増えるだけじゃない」

流石にもう耳に入っているか。まあ、今更非公式新聞部の接触をやるつもりはないがな。

「俺は何処にでもいる一般生徒にすぎませんよ？高坂先輩」

俺の言葉に高坂先輩は大きく溜息をつく。

「あんたの何処が一般生徒なのよ、あんたの悪名はあんたが入学する前からこの風見学園に知れ渡ってるのよ」

それについては俺も多少驚いた、見ず知らずの付属の先輩に話しかけられたことは何度もあった。

「そんなに大したことはしてはいなかったんですけどね、まさかここまで知られるのは驚きました」

「どの口が言ってるのよ、ちよつと小耳に挟んだだけでもあんたかなりやらかしてるじゃない。」

まあ、イベント事に何かしらやっていたからな。小学生のイベント事などは大したものでは無かったし教師陣の警戒も甘かったためか色々できて色々試すこともできた。

高学年以降は有意義な時間を過ごせたのは良い思い出だ。

「はあく全く、イベントが多いのも考えものね。非公式新聞部やあんた達みたいなのがここに入学してくるんだし」

「あんた達と言うことはやはり二人のこともご存知の様ですね」

「当然でしょ？あんた達三人の悪名は特にね、あんたが悪童ルルーシユで、雪村が小悪魔、んで花咲が悪女で、三人合わせて悪鬼三人組。一体何やらしたらこんな悪名がつくのかしらね？」

「ご想像におまかせしますよ、まあ、愉快的な事ですよ」

「あんた達にとつてはでしょ？はあ、弟君は兎も角としてあんたとあいつが組んだらどうなるかわかったもんじゃないわね」

高坂先輩がふと零した一言に俺は聞き逃さなかった。

（弟君は恐らくだが朝倉 音姫【あさくら おとめ】と幼少の頃から一緒だと噂の桜内 義之【さくらい よしゆき】だろう。だが、奴とは一体？）

生徒会の要注意人物のある程度の身辺調査は済ましている、そして今年の新入生のデータも一通り入手済み・・・いや、待て確か一人だけ名前以外なんの情報も得れなかった生徒が一人だけいた、まさかそいつか？

（確か名前は・・・）

ここまで来たところで俺の思考を遮るかの様に本鈴が鳴る。

「あつ、やば、戻らないと。ルルーシユ！なんか悪さしたらぬつ殺すからー！」

高坂先輩はそう言って走り去って行った、俺もそれを見送った後教

室へと戻った。

「杉並か・・・接触する必要があるな」

名前以外の事が一切わかっていない生徒の名を口にしながら。

悪虐皇帝と出会い

結局あの後杉並と接触はする事ができずにその日は終了した、下校の際やけに茜と杏の機嫌が良かったが何かあったのだろうか？

二人とは別のクラスなので普段は帰りのバスの中で今日の出来事などを話す、どうやら自分たちと友達になりたいと言ってきた女子生徒が弄りがいのある生徒らしく暫くは退屈せずに済みそうで杏は終始ご機嫌だった。

その言いように流石の茜も苦笑いしていた、俺たち二人は杏の複雑な家庭環境を知っている為杏が必要以上に他人と接点を持つとしない点についてあれこれ言うつもりは無い。

だが、願わくばその女子生徒が杏に変化をもたらす様な存在になってくれる事を祈る。現に茜はその女子生徒、月島 小恋【つきしま ここ】は茜の目から見ても素直で良い子らしい。

まあ、素直すぎて逆に弄った時の反応が良すぎて茜もつられて弄ってしまうみたいだか。

日は変わり翌日、教室の雰囲気少しざわついている中俺はクラスメイトと軽く挨拶を交わしつつ自分の席に座る、そしてそれを見計らってか一人の男子生徒が駆け寄ってきた。

「おいおい、ルルーシュ聞いたかよ!？」

俺の席に駆け寄って来たのは制服のボタンを全て外しその下に色付きのTシャツを着た男子生徒だった。

「騒がしいな渉、なにかあったのか？」

俺に話しかけてきた男子生徒の名前は板橋 渉【いたばし わた
る】どうやら俺のことを知っていたらしくそれがきっかけで交友を持
つこととなった。

今回の件、スポーツテストの際に一枚噛んでもらうつもりでもあ
る。こいつの人脈の広さは俺も驚いた、既に本校生とのパイプを持つ
渉、今回はその人脈の広さを使うことは無いだろうが後々役に立つと
見ている。

本人も祭り事に関してはノリノリであるため協力者にするにはこ
れほど適している人物はそうはいないだろう。

「ああ、聞いてくれよ。実は今日からよ教育実習生の人達が来るらし
いんだけどよその中によスツゲエ綺麗な女の先生がいてよ」

「それがまたマジで美人でよ、そんな人が俺らのクラスに来たらと思
うとよ朝からテンション上がりっぱなしなんだよ。」

「しかも、スタイルも抜群でさあ！そんな人が俺らのクラスに来たら
と思うとよ男たるもの興奮しないほうがその先生に失礼してもんだ
ろ！」

握り拳を掲げながらなにやら熱弁する、その話にクラスの男子生徒
数名が同調する様に頷いていた。

その光景を女子生徒たちは白い目で見ていた。

その後緊急集会で体育館に集められた全校生徒の前で教育実習生
たちと顔合わせすることとなった、その中渉の目当てであろう女性が
いたが残念ながら別のクラスに配属されることとなった。

俺たちのクラスに配属されたのは中年の男性であった。

その日渉のテンションは見てすぐわかる位に下がっていた、そんな渉の様子を見ながらも俺は真面目に授業に取り組むのだった。

「やれやれ、いつまで引きずってるつもりだ」

「んなこと言われてもよ、やっぱさー！青春には恋愛がつきものだろ！教師と生徒の垣根を越えた恋があっても良いじゃねえかよお」

「どんな起承転結があってそんなことになるのやら。ほら、早くしろ早くしないと学食の席が埋まってしまっぞ」

「わかってるよ、はあく俺の青春は真っ暗闇だぜ」

未だに未練たらたらな渉を引き連れて学食へと向かう、ここの学食は中々に種類が豊富であり利用する学生も多い。

なので出遅れると席の確保が難しくなる、購買で済ます者もいるがそこも激戦区だ。同じ激戦区なら肉体的疲労が少ない方を俺は取る。

学食に辿り着くと既に8割方席が埋まってしまっていた、俺と渉は席取りと購入の二手に分かれる。

購入は渉が、席取りを俺が担当する事となった。辺りを見渡すと二人が座ることのできる席は中々見つからない、席が空くまで待とうかと思っているとテーブル席で一人食事をしている男子生徒を発見す

る。

空いている席を見ても荷物などが見当たらないため恐らく一人だろう、相席をお願いしてみるか。

そう思い俺はそのテーブルに座る男子生徒に声をかける。

「すまない、少し良いか？」

「はい。」

これが俺と義之のファーストコンタクトであった。

悪虐皇帝と鈍感少年

「すまないな、いきなり相席をお願いしてしまつて」

「ああ、いや。別にいいよ。さつきまで一緒にいた人が居たけど用事があるつて言つてもう行つちやつたし。」

俺が相席をお願いした男子生徒は声をかけた時はぼつとしていたが、少しの間の後許可が出た。現在俺は渉が来るのを待ちつつ男子生徒、いや。

高坂先輩が言つていた噂の弟君こと桜内 義之と当たり障りの無い会話をしていた。

第一印象では中々の好青年だ、相席をお願いしても嫌な顔一つせず
に了承した。

だが、中々に興味深い人物だ。一見平凡そうに見えるがどこかカリスマ性と言うのかどこか惹きつけられる魅力を感じる。

(この手の人間は自然と人の輪の中心になっている人間だろう、本人には自覚は無さそうだが。)

高坂先輩が危惧する理由がわかる気がする、彼が俺のような問題児と何かしらのことを起こすと周りに与える影響は計り知れないものとなるだろう。

それと何故だろうか彼とは妙なシンパシーを感じる。

俺がそんなことを考えていると。

「オイツス、持ってきたぜルルーシユ。」

渉がトレイを二つ持って歩いて来た、一つを俺の前に置くと俺の隣に座った。

「何処にいんのかわかんなくてちよつと探したぜ」

「ああ、すまなかつたな。」

軽く会話を交わしたところで渉は俺の隣に座る、そこで初めて渉は向かいの席に座る桜内に気がつく。

「んっ、そいつ誰だ？」

「彼が相席を了承してくれた生徒だ」

「ふーん、てか。一人飯かよ寂しい奴だなあ」

「物凄い酷い一言を本人の前で言う渉、案の定桜内の表情が若干険しくなっていた。やれやれ。」

「渉、失礼だぞ。それにどうやら彼は先程まで誰かと食事していたようだしな。」

「およ、そうなのか。いやゝ悪かつたな。なんか好き勝手言っちゃまってよ」

「まあ、気にしてないよ。」

渉の謝罪に少しは怒りを収めたようだ。

「じゃーさ、お前。誰と一緒に飯食ってたんだ？」

「あー、高松先生だよ。学校の案内とか頼まれたんだよ。」

高松？ああ、高松久美子『たかまつくみこ』教育実習生か。今朝涉がなんやかんや言っていた人か。

しかし、驚いたなまさかこの短時間の間にもう交流を持つ仲になっていたとは。

俺が内心少し驚いていると、隣の馬鹿は先程の言葉に敏感に反応する。

「なにい!?!あの久美子先生ともう一緒に食事する仲にまで発展してんのか?!」

「いや、ただ案内をお願いされただけでそこまで仲良くなってるぞ」

「くっそおー、案内に託けて仲良くなる。その手があったか。」

涉はブツブツ呟きながら首を捻っていた、こういう時のこいつは碌なことをしない。また馬鹿みたいなことを考えているのだろう。

「なあ、なんかブツブツ言ってるけどどうしたんだ？」

「気にしないでくれ、いつものことだ。」

桜内が、聞いてきたので適当に流す。涉が真面目に考えている時は結果碌でもないことやたいしたことのない事を言い出す。

なので基本的に放置するのだ。

そして渉が勢いよく顔を上げる、さて今回は何を言い出すのやら。

「よし！お前。今日から俺と親友な」

「はっ？」

唐突の親友宣言に言葉に詰まる桜内、言った本人は何処か満足そうな笑みを浮かべている。大方桜内と仲良くしていれば高松先生とも仲良くできると考えたのだろう。浅はかな奴だ。

「いや、今日初めて会った奴といきなり親友とかおかしいだろ？それに俺はお前の名前も知らないし」

「ああ、俺は板橋 渉な。んでこつちがルルーシュ・ランペルージな。まあ、よろしくなえーと遠藤！」

「いや、遠藤じゃないし。桜内だ。桜内 義之『さくらい よしゆき』」

「応、よろしくな桜内！」

「まあ、悪い奴じゃない。ただ面倒くさい奴だがよろしくしてやってくれ。義之と呼ばせてもらおうぞ」

「ああ、まあ、よろしく。んっ？ルルーシュってもしかしてあのルルーシュか？」

義之が俺の方を見て言う、どうやら俺のことは知ってはいるようだ。

「改めて紹介するが、悪童と言われているルルーシュ・ランペルージだ。噂の弟くんと出会えるとはな。」

「噂って・・・そんなたいした人間じゃないぞ俺？」

「ふふっ、自分のことは実は自分が一番分かっているかもしれないこともあるということだ。」

俺の言葉に首を傾げる義之、なんとというか自分の事となると本当に鈍いな。そんな会話を繰り返していると。

「おやおやく悪餓鬼が揃って悪巧みかしらあゝ」

学食の入り口方面から一人の人物がやって来た、高坂まゆきであった。とても『良い笑顔で』俺たちの居るテーブルへとやって来た。

「ま、まゆき先輩・・・。」

「うおーマジか!!あの高坂先輩に声をかけられたのか?!くっはー!!俺今日死んでもいい!」

片や明らかに嫌そうな顔をし、片や馬鹿みたいにテンションが上がっていた。同じ人を前にしたりアクションでは無いな。

そうこうしている内に高坂先輩は俺たちの居るテーブルへとやって来る。

「やっぱり、まずは懐柔しやすい弟くんから接触したわねルルーシュ。」

「高坂先輩が何を言っているのか判りかねますね、彼と会ったのは偶

然ですよ。」

「どーだかね、あんたのことだから何か裏があるじゃないの？」

「ご想像にお任せしますよ、ですが」

一度言葉を切って俺は義之を見る、見られた本人は少し驚いていた。

「高坂先輩が危惧する理由を知れたことは有益でしたよ」

俺はそう言って立ち上がる。

「では俺はこれで失礼しますね、渉。先に行っているぞ。」

「えっ。お前いつの間に！」

渉の慌てる声をバックに俺は学食を後にした、桜内義之。面白い奴だ。

悪虐皇帝と幼馴染たち

食堂で高坂先輩と一悶着あった後日、今学校内ではスポーツテストの話がちらほらと上がっている。それに伴ってか最近休み時間になると生徒会の人間と思われる生徒に見張られ始めた。

問題児筆頭とも言える俺だ。生徒会も俺が何かしらのアクションを起こすと考えているのだろう。

まあ、その通りなのだが。だが。その程度のことですら辞めるつもりなど毛頭ない。

着々と準備を進める中未だに杉並という生徒とは接触できずにいた、所属しているクラスに何度か訪れはしたが。

気がつくともういないやら、さつきまでいたがいつの間にか居なくなっているということが殆どであった。

これはもう意図的に避けられているとしか思えない。向こうは俺と接触する気がないのかはたまたま何か他に理由があるかだが。

さて、時刻は既に昼休み。渉は別のクラスの友人と学食に行った。俺は今日は弁当を持参してきているため学食に行かなかつた。

「杏たちのクラスに行ってみるか？」

席を立つとそのままクラスを後にした、そんなに距離が無いのであっという間に杏たちのクラスに到着する。

そしてそのまま扉を開ける、クラスに残っていた人が扉を開ける音に反応し視線が集まる。

そしてその視線の中に目的の人物たちがいた、視線が合うと。

「あーっ！ルル君だ」

俺と視線が合った茜が大きく手を振っていた、隣にいる杏も小さく手を振っていた。俺は二人の元に真っ直ぐ歩いて行く。

「やつほールル君」

「ちやお」

「ああ、ここの席空いているか？」

「うん、この席の子は大体昼休みが終わるギリギリまでは帰ってこないから」

「そうか、なら座らせてもらうか」

そう言つて俺はその席に座る。そして机の上に持ってきた弁当を机に置く。それを見た杏たちは。

「ルルーシユ。もしかしてお昼のお誘いかしら？」

「んっ、ああ。久しぶりにどうかと思つてな。」

「あちやー、ルル君タイミング悪い〜。」

「私たち今日調理実習があったのよ、だからもうお昼は済ましちやつたのよ。」

「そうか・・・まあ、折角来たのに何もせず帰るのもあれだな。」

「そうだねえ、お喋りしながら。って言うのが無難かなあ？」

「ふふっ、そうね。私たちはルルーシユの食事風景を話のあてにするわ」

「じつじつくり観察するからねえ。」

なんともいい笑顔で言ってくれる、たが長い付き合いだからわかるがこの手の笑顔は碌でもないことを考えている顔だ。

まあ、時間ももつたいない為二人の視線を無視しながら弁当を広げる。俺に視線を向けていた二人の視線が弁当に注がれる。

弁当の中身を見て二人は感心したように俺の弁当を見る。両親は現在海外で暮らしている為家のことは全て俺がやっている。料理はもちろん洗濯や掃除に裁縫もだ。

ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアの時も家事もやっていたのがここで生きてくるとは思わなかった。

「相変わらずルル君の作る料理って美味しそうだね。」

「そうね、うら若き乙女の自信をへし折るのには十分過ぎるほどの代物ねあんたの料理は。」

「褒め言葉として受け取っておこう、そう言うお前たちだって料理は得意だろう。」

杏は家庭の事情により一人暮らしだった筈、その為俺と同じで家の

ことは一人でやっている。茜は現在お料理クラブに所属している、所属する以前から家事も家で手伝いをしている為か一通りできる。

この二人の料理は身内最良にしても同年代でも頭一つは飛び抜けていると言えるだろう。

その点から言うところの二人も人のことは言えないだろう。

「あつ、でも。桜内君も料理の腕はかなりのものだったよ。ちよつとびっくりしたかも。」

「確かにあれは大したものだったわね、他の男子なんて大多数が適当な炒め物ばかりだったのに桜内だけはまともな料理だったわ。」

「うん、そうだよね。あれはルル君といい勝負かもしれないね。」

「そうか、それは是非とも見てみたいものだな。」

俺の周りの男子生徒なんかは自炊する奴など殆どいない、なのであまりこの手の話題で盛り上がったことがない。渉なんかは料理のさしすせそさせも言えない。

なので是非とも料理のことについて桜内とは一度話してみたいものだ。

その後は、弁当の中身を死守したり。当たり障りのない会話をしたりしているうちに良い時間になってきた。

俺は弁当を包みに包むと席を立つ。

「じゃあ、俺はこれで失礼するぞ。」

「うん、また一人になった時はいつでも来ても良いよお。」

「その時は優しく慰めてあげるわ。」

「誘いは有難いが後者は遠慮しておこう、ではなまた放課後にな。」

「バイバイ」

「ちやお」

そう言つて教室から出る、本当なら噂の月島 小恋にも会つてみたかったが教室にいなかったことを考えると俺と同じで別のクラスの友人の所に行ったのだろう。

そう思いつつ自分の教室に戻る、余談だが茜たちと食事した事を渉に話すと。

『なんで!!俺を誘つてくれなかったんだよお!!』

と、言いながら号泣していた。渉を見る周囲の目は冷たかった。

悪虐皇帝と最強問題児

杏たちと久々の昼食を共にした日の放課後、遂に向こうから俺にコソタクトを囃ってきた。相手は無論あの杉並である。

俺の下駄箱の中に無造作に折り畳まれた紙が有ったのを見つつけ中を見るとただ一言書かれていた。その内容というのが。

『明日の早朝屋上にて待つ 杉並』

というものであった、この手紙を見て思わずほくそ笑んでしまったのは無理は無いだろう。俺の第一目標は非公式新聞部への入部だ。少なくとも杉並は俺よりも非公式新聞部に近い位置にいる人物だ、この誘いに乗らない訳にはいかない。

俺は手紙を懐に仕舞うとそのまま校舎を後にした。

そして迎えた当日の早朝、明確な時刻が記されていないなかったので朝一番のバスに乗り学園に向かった。茜と杏にはメールで先に行くこと伝えておいた。流石に返事は無かったがな。

バスから降り、何時もの通学路を歩く。早朝であるわけか空気が普段より澄み切っているように感じた。偶には早起きもしてみるものだ。そう思いつつ俺は学園へと急いだ。

数分歩くと見慣れた校舎が見えてきた、しかし、普段は開いている校門も今は閉じている。まあ、あと数分で門は開けられるだろうがもう杉並は来ている頃だろう。なら俺も急がねばならない。

俺は人目のつかない場所まで来ると周囲を確認し素早く壁をよじ登る、壁をよじ登っただけで既に息切れを起こしている。相変わらず

全く体力が付かないな。

いや、厳密に言えば体力は付いている。しかし、それはとても微々たるものであって決して増えていないわけではないんだ。結果も数字で出ている。

具体的に挙げるならば1500m走が以前は完走できなかったが今では完走できるようになった。平均より大分遅いが完走はできるのだ。

なので成長は実感するが微々たるものなのだ、前もそうだったがどうして俺は体力に恵まれないのだろうか。もう何かの呪いなのではないかと思う。

話が逸れた、いくら校門が開いていなくとも生徒会メンバーが見回りしている可能性がある。体力測定は明日なのだから見回りの強化をしていてもおかしくない。

生徒会副会長である宮下先輩は見た目とは裏腹に油断ならない人物だ、その上高坂まゆきと朝倉音姫も控えている。俺は細心の注意を払いながら屋上を目指した。

道中予測通り生徒会所属の生徒や風紀委員の生徒が数人見回りをしていた。その中には高坂先輩の姿もあった。流石に用心深いと素直に感心させられた。高坂先輩の獲物を探すかのようなキツイ目つきは無視しよう。

少し遠くの方から聞こえてくる門を開ける音を聞きながら俺はようやく屋上に辿り着いた。中々に時間を食ってしまったがまだ居るだろうか、そう思いつつゆっくと屋上の扉を開ける。

開けた先にはだだっ広い屋上に人っ子一人いなかった。帰ったか？と一瞬考えたが。

「上か？」

ふと視線を上に向けて辺りを見渡す、すると。

「むっ。」

「フッフッフツ、よく来たな。」

衣替えをしたにも関わらず春服の制服を着こみ、腕には何らかの腕章を付け、俺が言うのも何だか何処か胡散臭そうな雰囲気醸し出している男子生徒が俺を見下ろしていた。成る程こいつが。

「お前が杉並か、一応初めましてと言っておこうか。」

「ああ、初めましてだな。同志よ。」

ようやく会えた人物だ回りくどいことは無しにして本題から行かせてもらおうか。

「杉並、単刀直入に言わせてもらおう。非公式新聞部への入部を希望する。」

「ほう、やはりそうか。」

そう言いながら杉並は高台から飛び降りると俺の隣に着地する。杉並の言いぶんからすると俺の目的も察していた様だ。

「わかっているならば話は早いな、どうしたら入部できる？お前は既

に部員なのだろうか？」

「いや、俺もまだ非公式新聞部のメンバーではないのだ。」

「んっ、そうだったのか？」

思わず間の抜けた言葉で返してしまったが、改めて考えるとこの風見学園が創設してから存在する部活だ。下手をすればどの部活より長い歴史を誇る部活だ。

非公式の部活であるが入部条件は厳しいのだろう。

「同志ルルーシユよ。先方もルルーシユの能力を高く評価しているみたいだな。そこで俺から提案だ。」

「提案？」

「ああ、非公式新聞部への入部方法はただ一つ。非公式新聞部からの課題をクリアすること。その課題が後日に控えた体力測定で行われるトトカルチヨの仕切りと体力測定で何らかの催しを行う、だ。」

ここまで言われれば先程の提案の意味がわかる。

「成る程、お互いの利害は一致しているな……。良いだろう共同戦線といこうか杉並」

そう言いながら俺は杉並に手を差し出す、それを見た杉並も。

「交渉成立だな同志よ」

その手を掴み俺たちは握手を交わした、生徒会の人物が見れば最悪

の同盟が成立してしまったと言えるだろう。

しかし、そんなことは俺たちには関係ない。

「これから楽しくなりそうだな」

「フフフツ、それはこちらも同じだ」

その後俺たちは今後のことを少し話した、学園内では生徒会の目があるためおおっぴらに会えない為放課後に集まり夜に細工などは夜に行うことになった。

杉並か、これから長い付き合いになりそうだ。

悪虐皇帝と集う問題児たち

同日、杉並との接触があった日の学園内では明日の体力測定の話で盛り上がりを見せていた、特に男子生徒が張り切っていた。

唯の体力測定でどうしてここまでやる気を見せているのか理解に苦しむ、しかし、男子生徒がここまでやる気を見せている理由が今朝杉並から教えられた。

どうやら俺の知らぬ間に体力測定で一位となった男子生徒には教育実習生でやって来た高松先生からご褒美のキスが貰えるそうだがこれは本来草案段階でのものであり本決まりのものではなかったらしい。

まあ、あの杉並がそんなハマをやらかすとは思えん。杉並の意図的な工作なのではないかと思える。

そんな本人もあずかり知らぬ所でそんな話題が出てしまった以上は杉並も無視することはできないようだ、なので現状高松先生と一番親しくしている人物。

桜内 義之に高松先生の説得を頼んだそうだ。なんと言うか彼の身近にいる女性は学園では注目の的であったり憧れの人物であったりと、第三者の立場から見ればかなり羨ましい繋がりを持っていると言えよう。

その交渉の御蔭か高松先生からOKを貰うことが出来たそうだ。しかし。その代わりに二つの条件を出されたそうだ。

内容はシンプルで一つは義之が総合一位を取ること、そして二つ目はキスを忘れる程の事を起こすことだそうだ。

時刻は放課後、俺は杉並が指定した喫茶店へと向かっていた。当の杉並は遅れて来るそうだが、喫茶店には既に義之がいるそうだが。

目的の喫茶店に来た俺は迷わず入り口の扉を開ける、開けると喫茶店でよく耳にする音の後店内を見渡すと。

「あつ。」

「むっ。」

「おつ、ルルーシユじゃんか。おーいこっち来いよ。」

入り口から少し奥に行った四人掛けの席に義之と渉が居た。大きく手を振っている渉は無視し俺は二人のいる席へと歩みを進めた。

「よお、ルルーシユ。こんなところで何やってんだ？お前も誰かと待ち合わせか？」

「そう言うお前は他のクラスの友人たちと帰って居た筈だが？」

「へへっ、こいつは他の奴等と違ってよ中々鋭いツツコミするんだよ。こういう奴って中々いねえからな親睦を深めようって思つてよ。」

「そうか。」

渉も彼に何かを感じ取つたのだろうか？まあ、今回の事には渉にも手伝わせるつもりだったわけだしな。ここにいてもらうのは都合がいいかもしれないな。

「ところで、ルルーシユは何でここに？本当に誰かと待ち合わせして

るのか？」

「ああ、義之。君と同じで杉並とな」

「えっ!？」

「うお、マジかよ。」

義之と渉、両者共に驚きの表情を浮かべる。立ち直りが早かったのは渉であった。

「つーことは、ここにいた方が面白い事に一枚噛めるってことだな。」

渉はそう言って座り直す、どうやら居座る気のようにだった。まあ、こちらとしては人手が手に入るので願ったり叶ったりだ。

「えーっと、ルルーシュ。今回の事どの位知ってるんだ？」

義之が何かを探るような視線をこちらに向けてきた、義之が訪ねて来たのは恐らく高松先生の件だろう。

「ああ、そのあたりの事情も杉並から聞いている。」

「そうか、ならいい。」

俺の解答に満足したのか義之は視線を自分の手元にあるカップに移す。

「なあなあ、二人で何の話しをしてたんだ？」

話の真意がわからない渉が聞いてくるが俺は答える気が無いので

適当に誤魔化そうとする、その時。

「いや、待たせてすまんなあ。」

主役がいつの間にか其処に立っていた、全く気配を感じなかった。こいつは本当に謎が多い奴だ。最初の出会ったばかりの頃のC・Cの様だ。

「遅いぞ」

「どうせ何かの仕込みをしてたんだろう、それを込みの話もしてもらうが。取り敢えず今後の事について詳しく話して貰おうか」

「まあ、慌てるな。ところで同志ルルーシュよ。俺の見間違えではなければそこにいるのは板橋 渉で間違いないか？」

「ああ、人手は多い方が良さだろう。何かあれば俺が責任を取ろう」

「ふむ、まあ。同志ルルーシュがそう言うのであれば俺からは何も言わん」

「へへっ、最近退屈してたんだよな。やっと面白そうなことになってきたぜ！」

「フフツ。わかるか」

「へへっ、当然。」

板橋の参加は杉並からも認められた、という事で早速俺たちは本題に入る。先程杉並から聞いた話を改めて渉に話す。高松先生からキスの許可を取り付けた事を知ると義之を神だと言い始めた。

それはさておいて、ここで一つちよつとした問題が発生した。杉並曰く後二く三程人手が欲しいそうだ。下手をすれば生徒会に目を付けられかねない程の事をしようとしている俺たちに好き好んで進んで関わろうとする人などそうは居ないだろう。

しかし、俺にはアテがある。あの二人なら快く引き受けてくれるだろう。そう思っていた時喫茶店の扉が開く音が聞こえ音が鳴り止むのと同時に聞き慣れた声が聞こえた。

「あれえ?」

「あら。」

「あつ、義之。あれ板橋君もいる。」

「小恋」

「あれ、月島?」

杏と茜と一緒にやって来た女子生徒を見て義之と渉が反応する、そしてその女子生徒の名前を聞いてピンときた。

彼女が茜たちが言っていた月島 小恋なのだろう。パツと見た印象ではこれまた義之に似て人の良さそうな感じである。俺がそんな事を考えているといつの間にか杏と茜が近くにやって来ていた。そして。

「こんな面白そうな集まりに私達を呼ばないなんてルル君酷い。」

「そうね、その三人も関わってるんなら私達にも声を掛けてほしかつ

たわね。」

二人とも言っている事はキツイが顔は満面の笑みを浮かべていた、わかっているのに言っているなこれは。

「そういう訳だ杉並、この二人も参加で良いか？」

「構わん、寧ろ好都合だ。悪女と小悪魔の手腕を間近で見れる良い機会だ。ところで月島嬢はどうする？」

「ふえ？」

義之と話をしている途中で唐突に話を振られたせいか月島はポカーンとした表情をしていた。

「えーつと、何のお話？」

「とても楽しい事よ、折角のお誘いなんだから月島さんも一緒にどうかしら。私達も参加するんだけど・・・どうかしら？」

「そうだよ、折角のお誘いなんだし。それに桜内君も参加するみたいだしね。」

「えっ・・・そうなの義之？」

「まあ、そうだが。」

「・・・うん、月島も参加する」

少し悩んでいたがどうやら月島も参加する事になったようだ。誘い方に作為的な物を感じたのは気のせいだろうか。

「ふむ、参加メンバーはこれで決まりのようだな。ではこれから話す事は他言無用で頼むぞ」

杉並から今後の行動について話しを聞く、明日を本番に控えたスポーツテスト。仕込みは今夜だ。久々の催しもの更に参加メンバーは一癖も二癖もある曲者揃い、楽しくなりそうだ。

俺は確信にも似た何かを感じていた。

悪虐皇帝と下準備

喫茶店で集まった日の夜、時刻は既に十一時を過ぎているが俺と杏と杏の三人は風見学園の校門前に立っていた。警察に見つかれば補導されるのは想像に難くない。

しかし、ここ初音島は犯罪計数が全国的に見ても極端に少ない。しかも、事件を起こす人物の大多数が外からの観光客などである。

初音島に住む人々の性格が温厚な為か、はたまた枯れない桜の効果なのか。何はともあれ犯罪が少ないというのは良い事だ。その為か警察官の補導なども比較的に緩いから適当に理由を言えば二、三注意を受けるが大体直ぐに解放してくれる。

「私達が一番みたいだね」

「そうね、杉並なんかが一番に来てると思ったけど……。」

「まあ、焦らなくとも直ぐに来るだろう。」

そうやって俺は時間を確認する、予定していた時刻よりはまだ余裕がある。他のメンバーも来るならそろそろだろうが……折角の機会だ色々話を聞かせて貰うか。

「杏。」

「何かしら？」

「月島小恋、彼女はどうか？」

「……そうね、素直すぎる子ね。素直すぎで逆にこつちが参っちゃっ

たわ。私が失くしたものを目の前でまざまざと見せつけられた感じだわ。」

杏は元々実の両親に捨てられ施設にいた所を雪村 李『ゆきむらすもも』に引き取られた過去がある。捨てられた理由はわからなかったが杏を引き取った雪村 李に大切に育てられ、今から約三年ほど前にここ初音島にやって来た。

初めて杏を見た時は人形のように何時も何処かをボツと眺めていた事が多く余り接点は無かったが、次の年また同じクラスになったのを機に交友を持つようになった。

その時からあの驚異的な記憶力を有していた、初めて会った時とかなり印象が違っていたのはよく覚えている。当時の杏は何かを記憶するという事に夢中になっていた。そんな風に俺は感じた。

そんな杏に訪れた悲劇は俺たちが風見学園に入学する直前に起こった、養母であった李さんが亡くなったのだ。俺と茜は一度も会った事は無かったが杏は良く李さんの話をしていった。

李さんの話になると自然と頬を緩ませ嬉しそうに話す様子を見て俺たちもどれだけ杏が李さんを慕っているかがわかった。

唯一の肉親と呼べる李さんの死は杏にとって大きすぎるショックを与えた。しかし杏の不幸はこれだけでは無かった。

雪村の家はかなり大きな家らしく李さんは巨額の遺産を残しておりそれを巡り親戚同士が揉めたらしい、当然養子の杏にも遺産を相続する権利があったがそれに納得しなかった親族達から酷い言葉を浴びせられ続けたそうだ。

結果なんとか李さんと暮らしていた屋敷などは遺言の通りに杏の物になったそうだが、杏が負った心の傷は大きかった。

当時は俺たちと接する際にも何処か距離を置いていた、それと同時に今の様に毒を吐く様になった。

最初は戸惑ったが自然と以前の様に接する様になってから俺と茜は安堵したが、それ以外の人物には特に毒を吐く様になり他者との関わりを徹底的に無くしていった。

色々あって今は比較的落ち着いているが人間不信に陥っているのは変わらずどうかしななければならぬと思っていた矢先に彼女、月島 小恋が現れた。

茜から色々話を聞いたが、杏の冗談半分の告白計画などを流されつつもそれを実行したりと健気で素直な子と茜は常々口にしていた。

杏はどうかは知らないが茜は割と本気で応援していたらしいが、ついつい月島の困った顔がツボに嵌ったらしく弄り倒してしまうそう
だ。

その後は杏と茜が計画を組みそれを月島が実行するということを数回行い、人なりを見た茜曰く月島は素直な良い子という結論に至った。

その結果は喫茶店に一緒に来た時に見た通りだ、表情があまり変わらない杏ではあるが付き合いが長い俺や茜にはわかった。

その表情はとでもリラックスしていた、何があったか知らないがあの表情から察するに杏は月島を認め受け入れた様だ。これを機にもっと交友を増やしてほしいものだ。

「仲良くできそうか？」

「・・・そうね、そうしたいわね。月島さんもそうだけど他の三人とも茜やルルーシユみたいな関係を作りたいわ。」

「杏ちゃん・・・。」

「そうか、だが。そんなに構えずとも彼奴らとは良好な関係を築けそうだな」

「ふふっ、そうね。杉並と桜内はどこかルルーシユに似てるし。涉は・・・まあ、箸休めのものにはなりそうね。」

「杉並はわかるが、俺が義之と何処か似ているところがあつたか？」

「どちらかと言えば正反対に近そうだが。そんな様子の俺を見て二人はやれやれといった感じの表情を浮かべた。心外だ。」

「まあ、本人に自覚がないなら今はそれでいいわ」

「そうだねえ。まあルル君だし、しょうがないよねえ」

「しょうがないわね。」

二人は通じ合った様に言う、なんなんだろうかこの取り残された感。当事者のみが話について行けていないというのは何か納得いかないものがあった。

そうこうしているうちに、校門前には夕方喫茶店にいたメンバーが勢揃いしていた。あの後渉が来てその後いつの間にか杉並が合流し

ており、その次に月島が。そして最後に義之がやって来た。

「全員揃ったな」

杉並が俺たちを見ながらそう言う。俺たちはそれぞれ短く返事をするが。

「念のため本当に揃っているか点呼を取るぞ」

「いや、どう見ても全員揃ってるだろ？」

「番号っ!!」

義之のツツコミを無視し杉並は叫んだ、なんだかんだ言ってもノリ良い連中なので。全員がしつかりと点呼を済ませます。

点呼を済ましたところで俺たちは校舎へと侵入した。最初に訪れたのは体育館だった。そこで俺たちは二手に分かれることになった。

俺と杉並、月島、渉が屋上に設置する花火の打ち上げ装置の設置のため屋上に。義之と茜と杏が杉並が細工した小道具を持って体育倉庫へと向かった。

そして現在俺たちは花火装置の設置に取り掛かっていた。

「装置の設置ってなんか思ってたより簡単だな！」

「まあ、花火は本来もつと沢山の花火装置を使つてするからな。数が多い分設置に細心の注意を払う必要があるからな、一つだけならそんなに時間は掛からん。」

「ふーん、そんなもんか。」

「口を動かすのは結構だが設置はどうなっている？」

俺と渉が話をしていると杉並が注意してきた。

「安心しろ、不備は無い。」

「ふむ。」

杉並は静かに装置を細かく点検し、少しして顔を上げる。

「指定通りに出来ているな、完璧だ。」

満足げに杉並はそう言った。俺はその言葉に笑みを浮かべながらこう返した。

「当然だ、俺を誰だと思っている？」

花火の打ち上げ装置を設置し終え後は義之たちが来るのを待つだけとなり暇を持って余していると。

「あ、あの。ランペルージ君ちよつといいかな？」

「んっ、月島か。」

月島が俺に話しかけてきた、内容はまあ。十中八九杏のことだろうが。

「あの、ランペルージ君って雪村さんと友達なんだよね？」

「ああ、そうだな。そう言える仲ではあるな。それと俺の事はルルーシュでいい。ファミリーネームは言いづらいだろう?」

「ええっと、その、ルルーシュ君?」

「ああ、それでいい。俺も名前の方が呼ばれ慣れているしな、それと俺も小恋と呼ばせて貰うぞ。」

「ふえ?!ああ、あの。その。よ、よろしくお願いします。」

顔を真っ赤にし驚いた後照れながら言葉を紡ぐ、成る程なあの二人が気に入るのがわかるような気がした。

「それでその、ルルーシュ君私ね、雪村さんと友達になれたんだ。それでねその、ルルーシュ君とも友達になりたいな。なんて思ってね、そのルルーシュ君はどうかかな?」

なんと言うか律儀なのか天然なのやら、恐らくは後者なんだろうな。友達になりたい。そういう事を臆面もなく言えるのはとても勇氣のいる事だ。

月島 小恋。彼女は思ったよりも強い人間のようだ。

「俺なんかで良ければ喜んで。」

その後義之と合流し明日の打ち合わせを軽く済ましその日は解散した、明日の本番が今から楽しみだ。

悪虐皇帝と本番当日

体力測定当日、俺たちは着替えを済ませ体育館にいた。体力測定は午前と午後分けられる。俺たち付属の一年は最初は体育館での体力測定だった。

俺としては幸運だった、もし午前の部で持久走が来ていれば午後の時点で俺は使い物にならなくなっているだろうしな。自分の体力の無さに呆れるがこれは仕方ない。

ざっと体育館内を見渡してみると長座体前屈や上体起こし握力測定や垂直跳びなど、多岐に渡る様だ。

本番は午後のグラウンドでの測定だ、ここは午後の為に来るだけ体力を温存しておきたい。まあ、そこまで体力を削る競技はないが。

「よお、ルルーシユ。どうよ調子は」

「涉か、まあまあだな。競技はこれからだがお前はどうか？」

「んあ、俺も今からだぜ一緒に回るか？」

「そうだな、特別先に終わらしておきたいものもないしな。」

「うっし、じゃあ先ずは握力測定からやるかすぐに終わりそうだし」

「そうだな、握力測定はあそこか。」

握力測定の場所にはそこそこ人が居たが直ぐに番が回ってきた、左右の握力を測ると俺たちは人混みから出る。

「なあ、ルルーシユ記録はどうだった？」

「まあまあ、だな。」

「なんだよ、まあまあつてよ。いいじゃねえかよ減るもんじゃねえんだしよ見せてくれよルルーシユ。」

そう言つて渉は俺の肩に腕を回しながら絡んできた、こうなつたこいつは中々面倒くさい上にしつこい。まあ、別に見せても損することはない。

俺は渉に用紙を見せる。

「どれどれ、つと。ルルーシユお前握力弱いな。そんなんじやいざつて時大変だぜ？」

「俺は頭脳労働派なんだ、必要最低限の力さえあれば問題無い。」

「いや、けどよ。右の握力がよ17つて弱いだろ？流石によしかも、左も16つて。全然差がねえじゃん」

「俺は両利きなんだ、握力に差が無いのは当然だ。」

因みにだが、中学一年生の握力の全国平均値は男子が約24キロで女子は約22キロと言われている。更に言うと俺の握力17キロは小学校の5年生の平均記録となっている。

いや、だからなんだという話なんだが他意は無い他意は。

そんなこんなで他の競技を淡々と消費していくとその途中で俺たちは義之と鉢合わせした。

「よし、親友！」

「板橋とルルーシュか。」

「なんだよ、俺のことは涉って呼んでいいんだぜ」

涉が義之に肩を組んで馴れ馴れしく接する。相手にもよるが涉のこういう接し方は嫌がる人もいる為少しは自重することを勧めるとしよう。

涉の提案で俺と涉、そして義之の三人で廻る事となった。そこで前屈をやっている杏の姿を目撃した。

「おっ、雪村の奴結構やるな。」

「ああ、20センチ位は行ってるなあれは」

義之と涉が杏の姿を見て意外そうに二人がそう言う、杏の運動能力はまあ、平均的なものだが小柄な為か低く見られがちだ。

そろそろ俺たちも測かるため移動しようとしたが何故か二人が杏をじっと見てその場から動かなかった。どうかしたのだろうか？

「な、なあ。義之、ルルーシュ。」

「お、おう。」

「なんだ？」

「な、なんかよ。杏のあの姿を見てるとよ。な、なんかぞわぞわするよ

な。」

「あ、ああ。」

「？」

渉が何を言っているのかわからないが、改めて杏を見る。うん、別に何も感じない。というか義之までも同意するのか。

「おい、いつまでも油を売っていないで早く済ますぞ置いて行くぞ」

「お、おう。や、ヤバかったぜあのままだと俺の中の何かが大きく変わっちゃう所だったぜ」

「何を言ってるんだお前は。」

訳のわからない事を言っている渉を尻目に俺たちは測定の列に並んだ、その渉の後ろでホツと息を吐いていた義之が見えたが・・・まあ、別に気にすることは無いか。

その後は問題なく競技を消化していった、最後反復横跳びの際義之と一緒にやったのだからその際何故か杏と茜が義之を挟むように義之の両端に居座っていた。

そのせいか義之の記録は芳しくなかった、実際杏と茜が線ギリギリの場所に居たため動きが制限され思うようにスピードが出せず記録が伸びなかった。

それは義之の表情から見て取れた、何故あの二人はあんな事をしでかしたのか俺にはわからなかった。杏と茜曰く義之に一位になってもらうと困るからだという。何が困るのだろうか？

そして無事午前の競技を消化し終わると昼休憩に入る、体力テストで丸一日使うとはイベント好きの風見学園らしいと言えらばらしい。

昨日の話し合いで当日昼休憩の際花火を仕掛けた屋上に集まるように前日杉並から言われた、なのでこれから俺たちは可能な限り人に動きを悟られないように動かなければならない。特に生徒会の面々には。

教室に弁当を取りに行き、そのままその足で屋上に向かう。勿論周囲の警戒も怠らずにだ。

屋上に無事辿り着くと既に俺以外のメンバーが揃っていた。涉より遅かった事に少しショックを受けつつも俺は合流する。

「さて、ルルーシユも来たことだ。早々に昼食を済ませ細かな作戦会議といこうか。」

「んっ、まだ済ませてなかったのか？」

「ええ、私と茜と月島さんが皆の分のお弁当作ってきたのよ。」

「そうそう、皆の分を作ってきたのにルル君一人だけ仲間外れにするのは可哀想だったし待ってたんだよ」

「あはは、板橋君なんかずっとお腹鳴りっぱなしだもんね。」

「だってよく、こんな旨そうな飯が目の前に在るつてのによお預け食らってるんだぜ。腹の虫の一つも鳴るつてもんだ。」

「しかもよく、作ったのがこの美少女三人とくりやもく、男としては堪

んないってわけよ、義之もそう思うよな！」

「まあ、作ってくれたのは有難いし。三人の腕前はこの前の調理実習で知ってるから楽しみではあるな」

「もう、そんなことよりも早く食べようよ。私もうお腹ぺこぺこ。」

「あはは、そうだね。時間ももったい無いしね」

「ほら、ルルーシユあんたも座る」

杏に言われ俺は誰が用意したのと思われるレジヤースhirtに腰を下ろす。三者三様、それぞれの個性が出た弁当を見る。杏は中華風、茜は洋風。小恋は家庭的な料理となっている。

「では、本番である午後に備えて存分に英気を養うとしようか。」

「そうだな。」

「ああ。」

「うひょーどれも美味そうだぜ！」

「あはは、沢山あるからそんなにがつつかないでいいよ」

「どれもこれも自信作なんだ」

「ふふっ、味わって食べなさい」

がつつこうとする渉を窘めつつ、昼食を食べ始める。月並みにしか

言えなかったが三人の料理はどれも絶品だった。渉は終始満足気な表情を浮かべていた。

さて、昼食も済ませた。本番も本番である午後に向けて俺たちは最終確認と打ち合わせを始めた。

悪虐皇帝と企て

「昼食を終え作戦会議を始める俺たち、今は杉並からの渡されたりリストに目を通していた。」

「さて、今渡したりリストに目を通してもらいたい」

「ふむ。要注意人物リストか。」

杉並が全員に渡したのは杉並がピックアップした要注意人物を載せたりリストであった。ざっと目を通して見たが主に生徒会のメンバーが大半を占めていた。

「んっ、なあ。杉並名前の横に書かれてるこのマルとか三角ってなんだ？」

「あつ、本当だ会長は○で副会長は◎」

(音姉えと高坂先輩二人とも◎か、これってもしかして)

「それは危険度を表している、◎が一番警戒しなければならぬ人物だ。それから○、△、バツという順番だ」

「あれ？杉並君、この磯鷲って人だけ名前の横になんのマークも付いてないよ？」

茜の言葉に何名が再びリストに目を落とす、磯鷲涼芽『いそわしすずめ』生徒会の書記の役職に就いている人物であるが……。

「ああ、そいつは気にしなくていい。気にするだけ無駄だ」

「いや、でも生徒会の書記をしている人なんだろう？それなりに気を付けてないといけないんじゃないのか？」

杉並の言葉に理由が分からず杉並に質問する義之、だがこれは杉並の言う通り彼女は気を付けるだけ無駄だ。

「安心しろ義之、彼女は警戒するに値しない人物だ。俺も調査したが生徒会に所属しているのが不思議なくらいな人物だ。」

「それはそれでどんな人なのか逆に気になるんだが。」

「無駄話をしている暇はないぞ同志桜内よ、時間は有限なのだからな」

杉並の言葉に納得したのか義之も口を閉じる、全員の視線が杉並に集中すると杉並が話し始めた。

「当然だが花火を打ち上げるためのこの打ち上げ装置が見つかってしまえば我々の計画も破算となる、なのでまずは役員の目を上から反らすことが大事だ。」

「確かにな、本命はこれだけだしな。ダミーも幾つか用意して置いた方がいいだろう」

「既に、ダミーは幾つか作ってある。」

「いつ頃仕掛ける？」

「まだ仕掛ける時ではないな、競技の合間合間に仕掛けるしかないな。」

「仕掛けるとしたら・・・此処や此処が最適だと思うんだがどうだ？」

杉並が持つてきた学園の地図の数ヶ所に指を指しながら言う。

「悪くないな、打ち上げるにも良い場所を押さえられている。仮に発見してもパツと見ては分からないくらい精巧に作っている」

「素人目には簡単に判断できないようにして生徒会の動きを鈍くさせる為の策か、抜かりないな。」

「当然だ、これくらいしなければやり甲斐がないだろう?」

「ふっ、確かにな」

「ははっ、そうだろう?」

そう言うのと俺と杉並は互いに笑みを浮かべる、自分で言うのもなんだが今の俺は目の前にいる杉並同様悪い笑みを浮かべているのだから。

「なんかルルーシユ君と杉並君だけで話が進んでるね」

「そうだねえ、それにルル君楽しそうだね。」

「相変わらず策を考える時のルルーシユは生き生きしてるわね。」

「会議とか言ってたけど話し合っているのってルルーシユと杉並だけだよな。」

「いーじゃねえか、難しい事は彼奴らに任しとけばよ。」

他の五人が何か言っているが気にしないでおう。

「さて、後は随時連絡する。諸君の健闘を祈る!!」

杉並の言葉を皮切りに全員が「おっー!」と声を上げる。さて、午後の競技はグラウンドで行われる。

つまり、午前よりもハードな競技が目白押しな訳だ。午後の競技が終わるまで俺の体力が持つ不安であるがやるしかないな。

昼休憩が終わり俺たちもグラウンドに集まる、グラウンドでやる競技は懸垂や50メートル走、ハンドボール投げや走り幅跳び。そして最後には長距離走の計5種目だ。

「さて、先ずは何からするか」

人があまりいないものを探していると。

「50メートル走か、致し方ないか」

若干テンションが下がってしまった、走る競技なんかは俺にとって一番の難関だ、腕力を必要とする競技なんかも難関ではあるんだが。

「次の人レーンに並んでください。」

そうこうしているうちに俺の番が回ってきた、係りの人に言われレーンに立つと。

「よーい」

銃声が鳴り俺は走り出した、横に居た男子生徒がぐんぐん俺と差を作り遠ざかって行く。そして先を走る生徒はゴールする所を俺は見

ながら走る。

そして遅れながらも俺もゴールする、タイムは平均より遅いが何とか走り切ることが出来た。しかし。

「はあ、はあ。ぐっ、ああああ。」

「だ、大丈夫か？」

「あ、ああ。も、問題無い。こ、これ、くらい。」

「いや、息切れも激しいし汗も凄いですよ」

結局係りの生徒の肩を借りながら俺は日陰へと運ばれて行った。

「おいおい、大丈夫かよルルーシユ。」

俺が運ばれて行くのを見た渉と義之が様子を見にやって来た。この二人は俺の後で50メートル走をやったらしい。

「ああ、もう大丈夫だ。」

多少の倦怠感はあるがまだやれる、だが出来るなら1500メートル走は後回しにしたい。今の状態では以前の様に途中でリタイアしてしまうのが落ちだ。

残る競技は懸垂と走り幅跳びハンドボール投げそして俺にとっての鬼門である長距離走つまり1500メートル走だ。

懸垂の後にハンドボール投げは無理だ、なので自ずと残りの競技の順番は決定する。

「さて、そろそろ再開するか」

「おっ、もう良いのか？」

「心配無用だ、もう大分楽になった」

そう言っつて俺は立ち上がる。

「そうか、でも。無理はするなよ？」

義之の言葉に軽く頷くと俺たちは懸垂の場所、鉄棒の所に向かった。

「あっ」

鉄棒の前まで来ると義之が何かに気付いた様に声を出した、その視線の先には小恋がいた。

「あれ、月島じゃん。」

涉も気付いたのか斜め懸垂をしている小恋を見る、端から見ている分かるというか感じるが。

「なんか月島つてさ頑張ってるって感じがあるよな？」

「ああ、杏や茜が気を許すのが分かる気がするな。」

隣にいる義之も小恋から視線を外していない、しかも無意識なんだろう手を強く握りしめどこか小恋を応援している様にも見える。

しかし、結果は届かずに終わってしまう。

「なんかさあ、月島って可愛いよな」

「そうだな。」

俺は素直な感想を口にした。

その後義之と涉と別れた俺は走り幅跳びを済ませ、ハンドボール投げの場所に行こうとした時。

「そろそろだぞ同志ルルーシュ」

「杉並か、例の物が届いたのか」

後ろから気配なく杉並が声を掛けてきた、此奴が気配無く現れるのはもう慣れた。俺は冷静に対応する事が出来た。

因みに例の物とは打ち上げる為の六尺玉である。杉並の伝で用意した物らしいのだが此奴にはどんな伝が有るのか気になる所だ。

「六尺玉はルルーシュに受け取って貰いたい、その間に俺と板橋はダミーを設置しておく。」

「了解だ、杏達は？」

「雪村には桜内達で生徒会の陽動を任せた、生徒会の大多数の人間は競技や測定なんかで出払っている。」

「更に！本部に残っている僅かな役員を翻弄させることにより俺たちが動き易くなる。」

「計画も遂にクライマックスという事か、楽しくなってきたな。」

「ああ、では六尺玉は頼んだぞルルーシユ。」

そう言つて杉並は去つて行つた、作戦も遂に佳境を迎えた。柄にも無くワクワクしている自分を感じながら俺は受取の為に指定の場所へと歩き出した。

悪虐皇帝と打ち上げ花火

義之たちの活躍により上手く生徒会の役員たちの注意を逸らす事ができた。その間に俺たちは本命に無事花火を設置する事ができた。

杉並と渉もダミーを設置出来たそうだが、無論簡単にバレる様な所には置かずにちゃんと隠しているそうだが。ダミーが発見されると本命が有ると勘付かれてしまう恐れが出てくるためだ。

花火をセットした俺は競技に戻り走り幅跳びを済ませハンドボール投げの列に並んでいた。

「雲行きが怪しくなってきたな。」

ふと空を見ると灰色の雲が空を覆い隠していた、雨の予報はあったがそれは夜だった筈。終わるまで持つと良いのだがな。

ハンドボール投げも恙無く終わると俺は走り幅跳びの列に並んだ、其処には。

「やつほく、ルル君」

「ちやお、ルルーシユ。」

「あつ、ルルーシユ君。」

杏と茜それに小恋の三人が先に並んでいた。

「ルル君も長距離走を最後にしたんだ？」

「ああ、まあな。」

「ふふっ、やっぱりね」

「あー、私も長距離走って苦手なんだよね。」

「雪村さんと花咲さんとルルーシユ君も長距離走は苦手なんだね。」

小恋があははと笑いながらそう言ってきた、確かに俺はそうだ。少なくとも杏と茜も長距離走は苦手な部類に入るだろうがこの二人には別の目的がある。

「うふふ、月島さん長距離走はルル君に注目だよ」

「毎年ルルーシユのあの姿を見るのが私たちの恒例行事になってるのよ」

二人がとても良い笑顔でそう言う、相変わらず良い性格をしているなこの二人は。

その様子を見てよくわかっていない小恋は終始首を傾げているのであった。

走り幅跳びを終えて先に済ました杏たちと合流した俺は長距離走を走る生徒たちを眺めていた、その走る生徒の中には義之がいた。

そして測定係りの集団の中には杉並がいた、あの杉並がただ居るだけとは思えない。

「義之、頑張れー」

隣にいる小恋が義之に向けて声援を送る、現在義之は三位となって

いる。これは十分一位も狙える順位だ。

「あら、あのストップウォッチは確か。」

「んっ、どうかしたの杏ちゃん？」

「杉並が持つてるあのストップウォッチ昨日の夜私たちが杉並から渡されて仕込んだ物よ」

「えっ、ホント？」

「ええ、あのわざとらしく着けられた汚れは昨日の夜に見たのと全く同じよ」

「えー、私わかんない。」

杏と茜の会話を聞いて杉並の狙いがわかった、タイムに細工するの
だろうが長距離走では個人では無く集団で測定を行う、その為もし義
之が二位でゴールし一位よりもタイムが良ければ偽装工作が疑われ
る。

なので義之は一位を取りつつ二位とそこそこの差をつけなければ
ならないということだ。中々ハードな要求をしてくれるな杉並は。

だが、まだ始まったばかり。今後どうなるかはわからない義之の頑
張りに期待しよう。途中で朝倉 音姫が義之にエールを送って一緒
に走っている男子生徒たちに睨まれたのは余談だ。

朝倉 音姫。彼女をどうにかする際には義之に頼むとしよう。

義之が走り出して三週目に差し掛かったその時に異変は起きた。

「あつ、降ってきた。」

「これは……。」

「降ってきちゃったね。」

「ああ、今は小雨だが今後はどうなるか。」

「私たちはどうしよつか?」

「念のため校舎の中に入るぞ」

俺たちは校舎の中に避難した、俺たちと同様に競技中の生徒以外の生徒の殆どが校舎に避難していた。

その途中競技中の義之に視線を向けると戸惑いながらも続行を決めたように止めていた足を動かし始めた。

しかし、四週目に差し掛かったその時雨が更に強くなってしまった、更に義之を含む団子状態になっていた三人が転倒してしまった。幸い怪我は無かったようだが競技は一時中断となった。

「全然止まねえな。」

「スポーツテストどうなっちゃうのかしら?」

制服に着替えた俺たちは校舎入り口から外の様子を伺っていた、雨は依然と降り続ける。グラウンドにも既に大きな水溜りも出来ている。

この様子では明日に持ち越しになってしまうな。

「ふーむ、こうなってしまうっては延期は免れないな」

「そうね、流石にこの状況からの続行は不可能ね」

「ええー」

「マジかよー！」

「はう、がっかり」

杉並と杏の言葉に項垂れる、そんな中義之は。

「テストが中止になるんなら、賭けはどうなるんだ？」

このスポーツテストの裏側で行われている賭けについて義之は杉並に問いかける、しかし、義之には悪いがこれも取り止めなるだろう。

「んー、このままだと、後日に延期だな。そうなたら残念だが賭けは無効だな」

「何故？」

「既に各人ある程度の結果が出てしまっているからな、賭けのやり直しをするとなると。」

「予備知識がある分競技はあまり盛り上がりらんし、既に賭けは次回にとの話も出てきているしな」

「だからって賭けを中止にするの？」

杏が納得出来ないと言いたげな視線を杉並に向ける、まあ、杉並の事だ他に理由があるんだろう。

「それにだ、今回紛れ込ませた仕掛けを施した物も修理されるだろう。その中にもう一度同じ物を仕込むのも興ざめだ」

「まあ、一番の理由は俺の美学に反するといったところだがな」

「美学ねえ、それを言われた私からは何も言えないわね」

杏は一先ず納得した様だ、しかし、忘れてはいけない。俺たちにはまだアレがある。

「さて、そろそろ時間だな」

「ああ、アレの時間だ」

俺が言うのと杉並もそう言い返す、しかし、俺たち以外は何のことが理解していない様だった。

「なあ、ルルーシユ、杉並。アレってなんだよ？」

「何を言っているアレしかないだろう。」

「アレ？あーっ!!アレか!!」

杉並の言葉によく気付いたのか渉が大声を上げる、それにつられて他の面々もあれの存在を思い出した様だった。

「あと少しで打ち上げ時刻だ」

「えっ、でもこんな雨の中大丈夫なの？」

「一応こんなこともあるかと防水加工は施してある。」

「折角だし打ち上がるところをみんなで観に行こうぜ」

「えっ！外雨降ってるよ義之!!」

「どうせ濡れてるんだ、ここまで来たら思いっきり楽しまねえとな！」

「おおっ！いっちょやってやるか！」

「さんせー、面白そう。」

「まあ、偶にはこういうのも良いわね」

「柄では無いが・・・こういう時ぐらいいいか。」

「では、参るとするか」

各々がそう言って俺たちは雨が降りしきるグラウンドへと走り出した、俺たちはずぶ濡れになりながら打ち上げ花火がよく見えるグラウンド中央へと集まった。

「杉並、発射までの残り時間はどのくらいだ？」

「ふむ、後15秒ってところか。」

「それじゃ、カウントダウンいくか！」

「うむ、10！」

「9」

「8っ！！」

「7」

「6！！」

「5っー！」

「4」

「3」

「2」

「1」

「ゼロおおお！！」

俺たちがカウントし終えるのとほぼ同時に屋上から花火が打ち上がる、花火独特の打ち上げ音を発しながら打ち上げ花火は上空へと登る、そして。

鈍い音をさせ花火は爆発した。結果は失敗だ。

「うーむ、失敗か。改良の余地ありだな」

「えっ、えっ？花火はどうなったの？」

「失敗だよ」

「えっー、あんなに頑張ったのに。」

「まあ、防水加工が施されていたとしても所詮付け焼き刃だったからな。」

「マジかよ。」

「あはは、なんか一気に気が抜けちゃったね」

「そうね、花火がうち上がらなくて結局濡れ損ね」

全員が愚痴をこぼす、そして。

「チツキショー!!」

渉が大の字で濡れている地面に寝転がる、そしてそれにつられる様に茜と義之が。

「チクショー！悔しいぞー!!」

「この根性なし花火！この程度の雨なんかには負けたんじゃねえぞ!!」

「あはは、何それ義之」

数名が思いの丈を叫んでいたがその表情は笑顔であった。

「失敗だったが、悪くは無いな」

「ふっ、まあ。今回は運がなかったなお互いに」

「そうだな、ところで試験の合否はどうなる？」

「うーむ、結果は後日という事だった。まあ、俺や同志ルルーシユの能力を鑑みれば結果は言わずもがなだがな。」

「まあ、事を成功させたら合格とは言っていなかったなお前は」

「そういう事だ、入部試験は能力の把握が目的だからな。闇雲にやっ
て成功しても評価はされん」

「何真面目な話ししてんだよ二人とも、女子メンバーはなんか楽しそ
うに笑いあってるぜ。」

「涉に言われ俺は杏たちを見る、そこには自然な笑顔で笑っている杏
が居た。その光景を見て俺は安堵の息を漏らした。」

「よおーしっ！俺たちも女子に負けない様に笑うか!!」

「何馬鹿なこと言ってるんだよ」

「やれやれだな」

「ふっ、馬鹿者め」

「ああ、馬鹿さ。けどなここにいる連中は全員馬鹿だぜ!!」

「くっははははー!!」

「ルル君たちもなんか楽しそうだね」

「ふふっ、そうね。」

「あはは、でもこういうのなんかいいね」

俺たちは雨の中笑いあつた、雨の音にも負けず俺たちの笑い声は周囲に響いた。何故か分からないが笑いが止まらなかつた。

(上手く言葉に出来ないが・・・最高だ。このメンバーは。)

これからの学園生活に期待を膨らませながら俺は共に笑い合う面々を見ていた。

春風のアルティメットバトル 悪虐皇帝と卒業パーティー

三月それは一種の区切りの月である。三月と言えば卒業式が学生の間では真つ先に出てくる話題だろう。

ここ風見学園も例に漏れず校舎内では卒業式ムード一色である、しかし、天下の風見学園がただ卒業式をやって終わりでは無い。

イベントの宝庫である風見学園では卒業式後には卒業パーティーが行われる、風見学園では春季体育祭と秋季体育祭そして秋季体育祭の後に文化祭が、そしてその二ヶ月後にはクリスマスパーティー。通称クリパが開催される。

この様にイベントが目白押しな風見学園で最後のイベントとなるのが卒パである、しかし、今年の卒パは例年とは異なる盛り上がりを見せている。

「しかし、相変わらずこの学園生はイベントが好きだな」

クラスメイトたちを眺めながら俺は一人呟いた、まあ。非公式新聞部に所属している俺としてはやりがいもあるというものだが。

「おいおい、ルルーシュ。お前もぼーとしてないで手伝えよ」

「俺は今回裏方だからな、表の作業はお前に一任しているからな。余計な手伝いはしないことにしている。」

「まあ、お前は裏で色々考えてるんだろしな。そこんところはよろしく頼むぜルルーシュ。」

「いや〜しつかしよ。もう今回のイベントはよ俺たち付属二年一組の勝ち揺るがねえよな!!」

「学園のアイドル白河に、杉並や杏も認める頭脳を持ち主であるルーシユがいるんだからなあ〜。」

「ぐへへ、杏や杉並たちが悔しがめる姿を見るのが今から楽しみだぜえ〜」

渉はそう言うのと作業に戻って行った、さて。今回の卒業パーティーは異例の盛り上がりを見せている。その理由は今から三日前に行われた全校朝礼にあつた。

現生徒会長である磯鷲 涼芽（イソワシ スズメ）が今回の卒業パーティーを盛り上げる為、売り上げ一位のクラスには豪華賞品を贈呈すると言ったのだ。同じ生徒会の役員にも内緒で会費を捻出したそうだ。

恐らくこんな凶行に走った理由は十中八九今期の卒業生の中に前生徒会長である宮代会長がいるからであろう、磯鷲涼芽は異様な程宮代前会長に懐いていたからな。

そんなことがあつて俺たちが黙っているはずは無い、俺たち一組は渉の提案した白河 ななかディナーショーを。杏率いる二組は女子生徒がパジャマ姿で接客するパジャマ喫茶これに渉は素早く食い付いていた。

そして、杉並や義之と小恋の三組だが当日の破壊工作の為俺や杉並はクラスの出し物にはあまり積極的に参加していない。その為三組の出し物は委員長である沢井 麻耶（サワイ マヤ）主導の下無難な

フランクフルト屋となっていた。

その後出店を焼きおにぎりに変更していたが、何故焼きおにぎり何だろうか？何故か涉は何か理解した様な様子だったが。

そんな事はさておき、今回の卒業パーティーは各クラスが豪華賞品を目指して頑張って準備をしている。しかし、今回俺たちはもう一つ事を静かにそしてひっそりと起こしている。

表向きには豪華賞品を目指して、そしてその裏で俺たちは豪華賞品目的では無く別の目的の為に動いている。ちなみにこの事は涉は勿論、杏や茜も知らない。

知っているのは俺と杉並ともう一人の協力者のみだ。上手く立ち回らなければならない。まあ、俺なら問題無いわけだが。

そうこうしている内に時間はあっという間に流れ卒業式は滞りなく終了した、念の為だろうか生徒会メンバーが警戒に当たっていた。

だが、今回は俺も杉並も卒パに専念する為卒業式はパスである。つまり本番はこれからということだ。

そして俺も今クラスで開店前の最終確認を行っていた、最も朝にあらかたチェックしたのですぐに終わった。なので俺は裏の計画の打ち合わせをしよう。

俺はクラスの男子が集まっている場所に足を運ぶ、その中心にもう一人の協力者である女子生徒がいた。

「白河ちよつといいか？」

「あつ、ルルーシュ君。どうしたの？」

人懐こそうな笑顔を浮かべながら俺の名前を呼んだこの女子生徒の名前は白河。ななか。学園のアイドルと称されており男子生徒からは絶大な人気を誇っている。

クラスメイトとなった当初は接点は無かったが、中間テストや期末テスト時に涉に泣きつかれた際に一緒に面倒を見る事になりそこから接点が出来た。

白河はやたらとボディタッチが多い、それで勘違いし白河に告白し玉砕した男子生徒は多くいる。中には振られたを逆恨みして白河に強く当たったりする男子生徒もいる。

そういったことが多々ある為俺や涉、そして幼少の頃からの親友である小恋からも注意を受けている。しかし、それでも止まない為俺たちは頭を悩ませている。

そんな事はさて置いて、そろそろ本題に入りたい。白河も周りにいた男子生徒に断りを入れてから俺の所に来た。

「何かな？ルルーシュ君。もしかして愛の告白とか？」

その手の冗談もあまり得意でなくせに自ら墓穴にハマりに来るのはどうなんだ？まあ、時間が惜しい手早く済ませよう。

「冗談は置いておいて、例の件について少し話がしたいんだが？」

「もお、ルルーシュ君ノリ悪いよ。」

「時間が惜しいからな、階段の踊り場で良いな？」

「はーい、了解です。」

そうやって俺たちは教室を出る、その光景にクラス内が若干騒がしくなったが気にしないでおこう。

しかし、教室を出る際にちゃっかりと白河は俺の腕に自分の腕を絡めて来た。こういうのを辞めろと何度も小恋や渉からも言われているだろうに。

「うーん、やっぱり聞こえない。なんでだろ？」

「うん？何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ。ほら早く行こ？」

白河はそうやって何事も無かったかの様に歩き出した、白河はいつも俺に触れると何か呟いた後スツ、と俺から離れる、まあ、いいか。

思考を切り替えて人の波を抜けて踊り場まで来ると事についての簡単な最終確認を行う。

「えーっと、私は結局ルーシユ君の言った通りにすればいいのかな？」

「ああ、以前言った計画と相違は無い。後は杉並が上手くやる」

「あはは、私もついに問題児デビューかな？」

「安心しろ、白河にとって今回の事はノーリスクな上にハイリターンが約束されている。」

「お前の評価が下がる事はないだろう。」

「ほーんと、ルルーシユ君って頭良いよね。こんな事思い付くなんて。なんか生徒会の人とかが苦勞するのがわかる気がする。」

「褒め言葉として受け取っておこう」

さて、そろそろ時間なため、俺たちは教室に戻る事にした。戻った際に男子たちから白河と何の話をしていたかと質問責めにあつた。

「白河の人気の高さが伺える、さて卒業式が終われば遂に本番とも言える卒業パーティーだ。さて、今年の卒業パーティーはどうなることか楽しみだ。」

悪虐皇帝と一悶着

卒業パーティーが始まり既に俺たち付属二年一組教室の前には長蛇の列が出来上がっていた、やはり白河の人気は侮れないな。

それと同時に俺たち調理班や接客班も忙しくなっていた、デイナーシヨウと言っているので軽食も用意してある。飲み物も可能な限り種類を用意している。

最初のステージまで時間が差し迫る中クラスの男子生徒が慌てた様子で俺の元にやって来た。

「ルルーシユ、ちょっと来てくれ。」

「んっ? どうした?」

「あー、実は白河がさ……。」

「ふむ、わかった。今白河は?」

「ああ、今はステージ裏で待機してもらってる」

「ステージ裏だな? すまないが戻るまでここを頼む」

そう言っただけ俺は教室に作られた簡易ステージの裏に行く、そこには不機嫌な様子で渋をジト目で見る白河、そしてそんな白河にペコペコと効果音が付きそうな位に頭を下げ続けていた。

そんな光景を見ていると白河と視線が合う、すると白河がこちらにやって来ると。

「ねえ、ルルーシユ君聞いてよ。板橋君ってば私に嘘ついてたんだよ。」

「だっ、だつてよく。」

「まあ、落ち着け。まずどういうことなのか説明してくれ」

俺の言葉で少し落ち着いたのか、白河が話し始める。どうやら白河は卒パでは裏方に徹する予定だったが渉のお願いで表に変わったそうだ。

しかし、問題なのが今回の出し物で。白河は渉からトークショー的なものだと聞いていたが。

いざ本番当日になるとトークショーでは無くディナーショーで、ステージで歌うという事で聞いていた内容と違うという事でステージ裏で揉めていたそうさ。

「板橋君私が入前で歌うの苦手だつて知ってたでしょ？」

「そうだけどよ、ステージに立つのは白河だけじゃねえんだしよ。」

「俺らもさ一緒にステージに立つんだしよ、それで勘弁してくれねえかな？」

「そういう問題じゃないの、私は入前で歌うのは苦手なの。」

「そこをなんとか頼む白河！」

「無理なものは無理！」

「はあ、二人ともそこまでだ。」

二人の間に入る、まあ、側から聞いていても悪いのは渉だしな。このまま渉が変に意地を張って白河の機嫌を悪くさせると俺の計画にも響く。

「話しは聞かせてもらったが、100パーセント渉。お前に非がある。」

「うえ。」

「勝負に勝つためとはいえ相手の意思を無視するのは悪手だ。ここは最初に言ったようにトークショーにすべきだろう。」

「白河もトークショーなら文句は無いらろう?」

「えっ、う、うん。文句は無いけど」

「本人もこう言っているんだ、トークショーに今から変更すべきだろう。」

俺の言い分に渉は顔を下げていたがすぐに顔を上げる。

「へへっ、そうだな。せつかくの祭りだったのによ嫌々やらせるのは駄目だよな!」

渉なりに切り替えたのだろう、その後は白河に謝罪すると。

「なあ、ルルーシユ。トークショーって具体的には何やればいいんだ?」

「あつ、それ私も思った。私一人が延々と話し続けるのは流石に無理だよ?」

二人の言葉に頭を抱えそうになる、片やディナーショーをするつもりで動いていたからトークショーについてはノーマークだったんだろうが。

提案していた白河自身がトークショーについて全く知らなかったとは、まあ、やることはそう難しく無いしな。

さて。トークショーとは芸能人などといった著名人が気のおけない、おしゃべりを主体とした番組内容のことを指すことが多い。

テレビで見るバライティー番組などを参考にしたら分かりやすいだろう。

そうなる就先程白河が言ったように一人でトークをするというのは素人には出来ないだろう。

なので相方が必要となってくるわけだが、こういうことに一番適している人材といえば。

「渉、お前が白河と一緒にステージに出て司会進行をしろ。やる予定だった演奏も無くなつてやることもないんだろ?」

「へっ、いや、まあ、そうだけど。」

「それに、白河と付き合いがこのクラスの中では長い。気おける人が一緒の方が白河も気を張らずに済むだろう?」

白河の方に顔を向けて言う。

「うーん、確かに板橋君は気の知れた相手だし……うん、私は良いよ。」

本人からの許しも出たわけだしこれなら大丈夫だろう。

「うっし、それじゃディナーショー改めトークショー頑張ろうぜ!!」

「おおっー!」

どうやら解決したようだ、さて俺も持ち場に戻るとしよう。

俺は二人に一言二言言葉を交わした後にステージ裏を後にする、ステージを後にする際渉から特等席にいるお一人様の男子生徒に特上のサービスをしてやれと言われた。

なので、調理場に戻った後特等席にいる一人だけの男子生徒を探すと。

「早速偵察か？精が出るな義之」

「ルルーシユか」

「渉からのサービスだ、料金はあいつ持ちだ」

「太っ腹だな、そんなに自信があるんだな」

「そうだな、鼻肩目に見ても見応えのあるものになってると思うぞ。」

「へえ、ルルーシユがそこまで言うくらいだから期待できそうだな」

「ああ、存分に楽しんで行ってくれ」

俺はそう言つて品物を義之のテーブルに置き俺は調理場に戻る、そこからしばらくすると渉と白河によるトークショーが始まった。

側から聞いていても中々に好評で盛り上がっていた、やはり渉のトーク力や場を盛り上げることに關しては才能といつても過言ではないだろう。

更には渉と交流のある白河も渉の扱いというのをわかっているためか二人の掛け合いも大いに受けた。

これで売り上げもバツチリと言えるだろう、俺たちの計画のためといえ途中でトークショーを中止に追いやるといふのは中々に罪悪感が込み上げてくるな。

だが賽は投げられた、後は計画通りに進めるために頑張るだけだ。

悪虐皇帝と小ハプニング

卒パの前半が滞りなく終了する、妨害らしい妨害もなく一先ず各クラス共に様子見といったところか。

前半終了時の売り上げトップスリーは俺たち付属二年が4位以下と大差をつけていた。

かと言ってそんなに差があるわけでもなく僅差で並んでいる状態である。しかし、俺が注視すべきなのは下の4位〜6位のクラスである。

見た限りでは概ね予想通りの順位となっているが売上金の方が予想を下回っていた、そのせいで下位クラスとの差が殆ど無かった。

このままでは少しまずい、これをどうにか出来るかも知れない手はあるがこれを使うのはまだ早い、それに下手に動けば生徒会に察知されてしまう恐れもある。

やはりここはまだ静観に徹するしか無い、不安要素が浮き出てしまったが元々運任せな部分もあった計画な為こうなることは覚悟はしていた。

まあ、考えてもどうにもならないことをずっと考えていても仕方が無い。

後半が開始され俺は休憩時間をもらい活気溢れる廊下を歩いていた。前半ではずっと厨房で働き詰めだった為厨房担当だった何名かは休憩時間をもらっていた。

休憩に出る際に呼び込みをしていた茜にサービスすると言って店

に連れ込まれそうになったがなんとか逃げる事が出来た。

あの呼び込みは最早何処かの風俗店を彷彿させるものだった、あの店のアイディアを出したのは確か杏のはずだった。

異性のツボを的確に突いてくるの流石だと言うしかない、それに過度なスキンシップをしようとしていた客に対しても対策マニュアルはしっかりと練られているそうさ。

そして杉並と義之たちの焼きおにぎり屋もかなりの健闘を見せている、最初はどうかと思ったが目の前で女子生徒が作る、という点が受けたのか大盛況のようさ。

何故か付属一年生の朝倉 由夢【あさくら ゆめ】がおにぎりを握っているそうさ、非公式新聞部が仕入れた情報によると確か彼女は料理が苦手な筈だ。

文句を言う客が現れるのではと危惧したが何やら変なファンが付き始めたらしく、文句を言う客はいなかったそうさ。

俺個人の感想としては焼きおにぎり屋がここまで売れるとは予想だにできなかった、これは俗に言う女子の手作りに魅力を感じた。というものなのだろうか、俺には理解し難いものだ。

「さて、流石に何か食べるか。朝から何も食べてないことだしな」

白河と渉のトークショーが口コミで話題を呼び他校の生徒も大勢やって来て教室の前に長蛇の列を作った、その整理や準備していた軽食や飲み物などが底をつき補充に走ったりと慌しくしていたせいで碌に休憩時間が取れなかった。

入れなかった客は隣の杏のクラスに持っていかれたりもしたが、今はこの空腹を満たすことにしよう。

そうして俺は手元にあるパンフレットに視線を移し、飲食店が立ち並ぶ入口付近のコーナーに目を移し、何かめぼしいものがないかパンフレットを見ていると。

「はうー！」

背後から女性の短い悲鳴が聞こえたと思うと次の瞬間には俺は頭から冷たい液体を被っていた。

唇まで垂れてきたそれを舐めると甘酸っぱかったので恐らくはオレンジジュースであろう、俺はゆっくりと後ろを振り向くと。

「うつく痛いです」

「まひる大丈夫？君は・・・あんまり大丈夫じゃないみたいね」

転んでジュースを俺にかけた女性の連れの女性がまひると呼ばれた女性を気遣いながら俺の方を見て苦笑いを浮かべていた。まあ、ハタから見れば今の俺は中々に滑稽な姿をしているだろう。

「ええ、まあ。ですが制服は濡れていないのが幸いです」

「はううーすみません」

「もう、まひるったら、そんなに慌てなくても大丈夫って言ったのに。」

「ううー、久しぶり振りの学校に思わずテンションが上がってしまい

まして。例えば・・・。」

「連日連夜雨ばかりでまたかあくとなつてるところに唐突な晴れ模様、久々の晴れに気分も晴れやかにいざ外に飛び出すと玄関先のアスファルトで四葉のクローバーを見つけた。つて時ぐらいテンションが上がっていました。」

うん、彼女は中々独特なセンスをお持ちのようだ。伝わりそうで伝わりづらい例えだ。

「あはは、ゴメンねこれはまひるの癖のようなものだから」

「えっ、ええ。まあ。人には個性というのが有りますし。いいのではないでしようか」

「あっははは、つて。談笑してる場合じゃないね。早くその頭洗わないとね」

言われて気がつくが、被っていたオレンジジュースは既に乾き始めていた。確かにこのまま乾いてしまうとベタベタして気持ちも悪い、早く流したいところだ。

「あれ？もしかしてそこに居るのはまひるちゃんとミキちゃんかな？」

「あつ。さくらさん！」

「あーっ、さくらさん!!お久し振りです！」

「にやはは、二人とも元気そうで何よりだよ。」

二人の女性の後ろからやって来たのはこの風見学園の学園長にしていくつもの博士号を有している芳乃 さくら【よしの】学園長であった。

見た目が若々しすぎて初めての人は必ずと言っていい程に学園長を学園長だと信じてもらえないことが多々あるらしい。

そんな芳乃学園長は義之の保護者らしい、義之曰く一人でいたところを芳乃学園長に保護されたそうだ。義之も義之で中々にヘビーな過去を持っているようだ。

「所で二人はこんな廊下のだ真ん中で何してるの？」

「ああ、実は・・・」

ミキちゃんと呼ばれた女性が芳乃学園長に事のあらましを説明する。

説明が終わると学園長が俺の方にやって来た。

「にやはは、ルルーシュ君も災難だったね。」

「ええ、まあ。ですが、濡れたのが頭だけで助かりました。」

「うん、でも。やっぱりそのままは気持ちも悪いしね。僕の部屋のシャワールーム使っていいから早く流すんだよ。」

「学園長の部屋？ああ、学園長室ですか……。何故学園長室にシャワールームが？」

「いや、僕の仕事柄泊まりで仕事する事も良くあるからね。だから

寝泊まりに不便がないようにしたんだ」

「そうなんですか・・・なら有り難く使わせていただきます」

「うん、身も心もさっぱりさせてこの後の卒パも頑張つてね。それじゃミキちゃんともひるちゃんも卒パ楽しんで行つてね、チャオ。」

学園長はそう言うと言いつつ鼻唄を歌いながらその場を後にした、ミレイ会長がそのまま大人になったかの様な人だ。

だが、確か学園長はこの風見学園のかつて生徒で朝倉姉妹の祖父の朝倉純一と幼馴染だった筈だ。

歳の差はほんの2、3歳だった筈。それがあれ程に若々しい、もしや学園長は・・・。いや、憶測でものを語るのは止めておこう。無闇矢鱈に他者の事情などに踏み込むのはマナー違反だ、誰にだって踏み込まれたくない領域は存在するのだから。

何はともかく学園長のご好意に甘えるところでしょう、ここで二人と別れることとなったのだが。

「いや、まひるが迷惑かけたし迷惑料として何かお詫びしたいな」

との申し出を受けたのでご好意に甘える事にした、昼食代が浮くのは有り難い。

学園長室のシャワールームで頭を洗い終わり、学園長室を出ると二人が待っていた。二人と色々話をした。

この二人はこの風見学園の卒業生で今は水越病院に勤務する看護婦らしく、二人は付属の頃からの付き合いでその当時まひるさんに

色々あつたらしく、その出来事がきっかけで二人とも医療関係の仕事に就くことを目指す事になったそうだ。

屋台が立ち並ぶ区画まで来ると目ぼしいものをある程度購入すると飲食可能な区画までやって来る、ミキさんが気前よく色々を買ってくれた。

そこそこ量はあつたがなんとか食べきれた、食べ終えた後は二人と談笑して過ごしていた。二人とも俺が非公式新聞部に所属していると言うととても驚いていた。

二人と他愛無い話をしてしていると。

「おおーいルルーシュ!!」

「んっ、涉か。どうした?」

血相を変えて涉が俺の元に走ってきた、どうやら何かあつた様だ。

「おう、ルルーシュ・・・って、お前こんな美人二人もゲットしやがったのか!う、羨ましいいー!!」

ミキさんとまひるさんの存在に気付いた涉がまた騒ぎ出した、その様子を見た二人は驚いた表情を見せた後苦笑いを浮かべていた。まあ、唐突にこんなの見せられてはな。

「おい、話が脱線してるぞ。何があつたんだ?」

俺の言葉を聞いてハツとしたのか涉の表情が引き締まった。

「そ、そうだった!大変だぜルルーシュ、白河がいなくなっちゃった

!!」

俺は渉の言葉を聞き、内心ほくそ笑む。予定通りだ、後は悟られない様に上手くやるだけだ。

俺は席を立つと二人の方を見る。

「すみません、トラブルの様なのでこれで失礼します」

「いいいいいよ、そんなに私たちに気を使わなくて。クラスが大変なんですよ？早く行ってあげて」

「ミキちゃんの言う通りです、トラブルのせいで楽しめるものが楽しめなくなってしまうってのは苦労が無駄になってしまいます、例えば……。」

「はいはい、まひる今はそれいいから。ほら早く行ったげなさい」

「はい、では失礼します。」

「お、おい待てよルルーシュ！」

そう言つて俺は校舎へと駆け出した。

「ああゆう姿を見ると昔を思い出すよねまひる」

「そうですね、準備の時私が失敗した時はよくミキちゃんに助けられましたね」

「そうだねえ、今では落ち着いたけど昔は酷かったもんねまひるのドジっ娘ぶりは」

「ああ！ミキちゃん酷いです。」

「あはは、ゴメンゴメン。じゃ、そろそろ行こっか。」

「はい、あつ、そういえば何ですけど。」

「どうしたのまひる？」

「私、ルルーシユ君と何処かであつた気がするんですよ。多分なんですけど。」

「えっ、そうなの？あつ、でも確かにあの容姿は街中ですれ違ってても結構印象に残りやすいかもね。もしかしてまひるって歳下が好みだったり？」

「な、ななな、何言ってるんですか！そんなんじゃないですよ！ただ本当に何処かであつた気がするんです。」

「冗談だってば、で？何時頃あつたのルルーシユ君とは？」

「えーと、多分ですけど私が入院してた時だと思います」

「そうなの？でもまひるは個人部屋だったし、かと言って歩ける状態

でもなかったし・・・本当にその頃にあったの？」

「はい、多分その筈なんですけど・・・記憶がぼんやりとしていてハッキリ覚えてないんです。」

「うーん、まあ。その事は病院の記録を見れば分かるでしょ。初音島で大きい病院と言えば水越病院だけだろうしね、ルルーシユももしかしたら入院してたかもしれないしね。」

「そうですね、今は折角の卒パを楽しみましょう！」

悪虐皇帝と実行

さて、涉から白河がいなくなったという報告を受け現在俺は自分のクラスに居た。

白河の控え室となっていた教室を見張っていた生徒によるとほんの二、三分持ち場から離れて戻って来てしばらくしてから直ぐ教室を覗き見ると白河がいない事が判明した次第である。

教室内は騒然としており様々な声が飛び交っていた。

「どうだ!? 見つかったか?!」

「どんな情報でもいい! 白河の目撃情報を集めろ!!」

「次の公演まで時間無いぞ急げ!!」

「もう、時間ねえよ! 間に合わねえよ!!」

「泣き言言ってる暇あるなら探しに行つてこい!!」

白河を探すのに躍起になって教室内は慌ただしくなっていた、このままでは収集がつかなくなってしまうな。

やれやれと思いつつもこの事態を引き起こした一因は俺にある、というよりもこのままにしておくのは計画云々は置いておくとしても彼奴らに負けるというのは癪だ。

迅速に対処せねばな、俺は教室内に作られた特設ステージに立つと二回大きく手を叩く。

その音は周りの声より小さい音にも関わらず、クラス内に響いたように感じた。クラスメイト達の視線が俺に集中する。全員の視線が集まったのを感じ俺は口を開く。

「落ち着け、慌てても事態は好転しない。」

俺の言葉を聞きクラス内は先程とは打って変わって静かになる、さて、これで話しやすくなったな。

「緊急事態につき俺が指揮を取るが構わないな渉？」

「お、おう。」

よし、渉からの許可も出た。此処からは俺の計画通りにやるとしよう。

「さて、まずは白河を搜索している生徒を全員戻す。」

「えっ？いやいや待てよルルーシユ。主役の白河がいねえとどうしようもねえだろ？」

渉の言葉を皮切りに周りからも同様の言葉が飛び出してくる、予想通りの反応だ。

「勿論ちゃんとした理由は有る、まず男子生徒をターゲットとした店が他に有ると言う事だ」

「それって杏達の店か？」

「ああその通りだ、同じ男性客をターゲットとした店が二件並んでいる。これは客の奪い合いが必然的に起こってしまうだろう。」

「そうなる」と妨害工作が熾烈なものになるのは明らかだ、ならばそれを避けるために白河がいないというこの状況を逆手に取り、ターゲットを男子生徒から女子生徒に変更する。」

俺の言葉を聞き察しの良い生徒たちは予測がついたようで、俺の事を見る。自分で言うのもなんであるが俺は女子生徒からの人気がある。

これを使わない手はない、現に今。俺の発案に対し女子生徒たちの反応は良好である。

中には黄色い歓声を上げている者もいる、男子生徒たちもこれ以上無い手であると思っっているのだろう。先程から一転して笑顔をみせ始めていた。

「おおーしっ!!やることも決まったことだし、とつと準備に取り掛かるぜオメエら!!」

渉が声を上げると、渉のテンションに触発されてか周りもより一層士気が高まった。

やはり、こういった時の渉は頼りになる。此奴の場を盛り上げるといふ点は高く評価できる。

渉はなんだかんだで言って頼りにされている節がある、それが主に女子には無く男子であるという点はどこか虚しさを感じる。

そんなことはさておき、渉が中心となり物事がスムーズに進行して行く中俺はというと現在控え室で待機している。

ある程度の指示は済ましているので後は待つばかりである、そして俺は制服のポケットから携帯を取り出すと。

『全て予定通りに進行している、生徒会も俺たちの動きに勘付いている様子は無い。後の仕込みは彼女に任せる』

メールを送信し、しばらくすると返信が来た。

『OK、計画は最終段階へと突入した、各員の奮闘を祈る。』

やり取りをしているのは俺とお前だけだがな、まあ。そこはどうでもいいが。

『卒パの終了は近い、気を抜くなよ杉並』

『フッフッフ、当然だ。お前も油断するなよルルーシュよ。ではさらばだ!!PSこのやり取りを記録したメールは直ぐさま削除するように。削除しなかった場合貴殿の携帯はウイルスに感染する』

相変わらずの文面である、だがまあ。いい、最終段階に入った時点で俺たちの勝利は揺るがないものとなった。後は杏たちとの売り上げ対決のみだ。

この勝負はもう無意味なものであるが、折角だ勝ちに行くとしてしよう。

俺は誰もいない教室でほくそ笑みながら自身の出番を待つのであった。

悪虐皇帝と幕引き

現在俺たちは体育館に整列していた、卒パも滞りなく終了し体育館には全校生徒が集っていた。

因みに白河ななかディナーショー改めルルーシユ・ランペルージディナーショーは大成功を収めた。

最初は白河目当ての男子生徒たちから不満の声が上がったがそれを帳消しにするぐらいの結果を残した。

杏や杉並たちからの妨害も殆どなく万事問題無く終えることが出来た、そして今学園長や先生方の挨拶などが行われている。

「いや、後少しで結果発表だな。まあ、当然一位は俺たちがいただきだろうけどな」

「途中で白河がいなくなったからな、その遅れを取り返していたら可能性は多いにあるだろう」

「にっししし、俺たちが一位を取って杏や茜に杉並が悔しがめる様子が目に浮かぶぜ！」

「あらあら、何処かの誰かが妄言を吐いていると思えば上客の涉じやない」

「ねえ、私たちのお店で沢山お金を使ってたのはどこの誰だったかな？」

聞き慣れた声が二つ聞こえそのまま声のする方を向くと杏と茜が笑みを浮かべながら立っていた。

後渉は茜の言葉にグウの音も出ないのかバツの悪そうな顔をしながら目を逸らしていた。

「渉、幾ら出したんだ？」

「えっ、いや、その。そ、そこそこ？」

「ふふっ、そうね。そこそこ落としてくれたわね渉は。」

「ねえ、あんなにたくさ……じゃ無くてそこそこのお金を落としてくれたよね」

杏と茜の表情が生き生きしているのとは対照的に渉の顔色はどんどん悪くなっていった、こいつはまったたく。これ程まで動揺するという事は相当な額をパジャマパーティーに落としているなこいつは。

周りを少し見渡すと俺たちのクラスの男子生徒たちの内数名が俺と視線が合うと目を逸らしたり、顔を伏せたりしていた。

これが俗に言う男の悲しい性というやつなのだろう、いくら行くなと言われても情報というのは本人の意思関係なく入ってくるものだ。

それを完全にシャツトダウンする事はほぼ不可能だ、別にそれを責める事はしないし、そもそも責めるのは御門違いというものだ。

「ふっふふ、盛り上がっているところ済まないが、一位は俺たちに決まっているではないか。なあ？ 同士桜内？」

唐突に現れて俺たちの会話に参加してきたのは杉並と、その後ろに

は微妙な表情を浮かべている義之と困った笑みを浮かべている小恋がいた。

「いや、まあ、結構な手応えはあったけど。どうだろうな？」

「でも、勝つためとはいっても杉並君他のお店の商品を買っちゃ駄目だって言っただけのお店周れなかったんだよね。」

「ああ、事前にチェックしていいこうと思っただけ店結構あったんだけどな」

「ふっははっ！勝つ為だすまん。許せ。」

流石杉並と言ったところか、徹底しているな。まあ、付き合わされたクラスメイト達には同情するが。

昼ごはんも自分たちが作った焼きおにぎりだけだったそうだが、義之の買い置きのお菓子があってなんとか耐えられたそうだ。

毎度思うが義之の買い置きしているお菓子は何か包みなどに梱包されておらずそのままの状態である事が多々ある、何故わざわざ包みから出すのだろうか謎である。

一度その事について訪ねた事があるが、はぐらかされた。まあ、義之の場合答え辛い話題を振られると茶を濁して逃げる事が大半だからな。

今回のお菓子の事もどうやらその類のものだったみたいだ。お菓子の事を何故はぐらかすのかわからないがな。

「おつ、音姫先輩たちが出てきたぞ」

そうこうしているうちに壇上の上に生徒会の面々が現れた、それに伴い周りの生徒たちも自然と談笑をやめ壇上に注目していた。

お決まりと言っても過言ではない堅苦しい話から始まった。しかし、大多数の生徒の関心はやはり磯鷲生徒会の言っていた豪華賞品だろう。

かと言う俺たちもその話が出るのを今か今かと待っているのだから、そして遂にその時がやってきた。

「えーっ、ではこれより模擬店の売り上げ金の順位を発表致します。勿論一位を獲得したクラスには豪華賞品が贈られます！」

ようやく、今回の卒パのメインイベントの時間の様だ。

「それでは発表の方は朝倉、高坂。よろしくね」

「はー」

「それでは、時間も惜しいのでちゃっちゃと発表します。それではまず第三位本校三年一組」

発表と同時に歓声と疑問を持った声が出た、隣にいる渉からも「あり？」と言った声が聞こえてきた。

「続いて第二位は付属一年一組です。」

この発表に周りの生徒たちも騒めき始めた、優勝候補と言われている俺たち付属二年がここまで呼ばれていない事に何事かと騒ぎ始めた。

渉や杏に茜、そして義之や小恋と何故か義之たちのクラス委員長である沢井麻耶（さわいまや）も慌てている様子だ。

あの様子では杉並に焚き付けられたな。沢井は煽られて我慢できない性格でもないか。

そして、最後のクラス。つまり一位のクラスが発表される。

「それではいよいよ第一位のクラスの発表です。」

「第一位は・・・二年一組!!」

発表の直後、義之たちのクラスから割れんばかりの歓声上がる。クラスメイト同士お互いの健闘を讃え合っている。

だが。

「もう、音姫きちんと発表しないとダメでしょ?」

壇上から聞こえてきたこの言葉に生徒全員が押し黙る。

「え、改めまして第一位は本科二年一組!!」

この発表に再び体育館中の生徒たちが騒めきだす、それもそのはず優勝候補であった俺たち付属二年が一クラスも呼ばれなかったのだから。

そしてそれに追い討ちをかけるような言葉が告げられる。

「えーっ、ちなみに驚異的な売り上げを叩き出した付属二年の一組、二

組、三組ですが・・・。」

「他クラスへの妨害行為、学生の本分を著しく逸脱した公序良俗に反する出展内容などの理由から。協議の結果失格となりました!!」

失格か・・・、まあ、予想通りの結果だな。

「問題児たちは反省する様に」

「残念でしたね、皆さん。しっかり反省してくださいね。」

朝倉 音姫が笑顔でそう言い放つ。笑顔で中々キツイことを言う、この結果を聞いて俺たち付属二年の生徒からは大なり小なり苦情や不満が上がる。

「静かに！この決定に不満があるなら店の売り上げ金も全額没収する事にもなりますが」

この鶴の一言により治った、こうして卒業パーティーは幕を降ろした。付属二年の生徒の大多数がガツクリと肩を落としている中俺は人知れず笑みをこぼしていた。

すまないがこの勝負俺たちの勝ちだ。

「はあく、なんかどつと疲れたな」

「それはごつちのセリフですよ。私結局最後まで手伝わされたんです

よ?。」

「まあ、弟くんもこれに懲りたらもう問題行動は起こさないことね」

「いや、妨害工作は杉並がやったことですからね。」

「いや、兄さんも妨害してきた人たちかなり危ない感じで追い返してましたよね」

卒業パーティーが終わり、俺、桜内義之は妹分の朝倉由夢【あさくらゆめ】と音姉こと朝倉音姫と音姉の親友である、高坂まゆき先輩と帰路についていた。

話題は勿論さつきまで行われていた卒業パーティーについてだ、俺たち付属二年の話題が主だった。

まあ、基本まゆき先輩の俺たち付属二年の愚痴ばかりだったけど。

そこでふと気付いた音姉が終始無言で何か考えるかのように手を顎に当てていることに。まゆき先輩と由夢もそれに気付き音姉に話し掛けた。

「どうしたの音姫、考え込んで何かあったの?。」

「お姉ちゃん?。」

「うん、あのね。本当にあれで終わりだったのかなって?。」

「???」

「ルルーシュ君のことよ、ルルーシュ君今回杉並君みたいに妨害工作

を行うこともなかったでしょ?」

「もしかしたら裏で何かしてたんじゃないかなって思うの」

音姉の言葉にまゆき先輩が押し黙る、ルルーシユ・ランペルジ。風見学園入学前から数々の伝説を作り、初音島に限り同年代であいつの名前を知らない奴は居なかった。

噂話に疎い俺でも一度や二度その名前を耳にした、風見学園に入学する前まではなんか凄いやつという印象しかなかったが。

実際目で見てみるとなんか言葉では言い表せない何かを感じた、あれがカリスマ性というやつなのかもしれない。

「んー、でもあいつずっと自分のクラスの出し物にかかりつきりだったらしいし。」

「それに、後半はルルーシユ先輩いなくなった白河先輩に変わってトークショーやってみましたし・・・お姉ちゃんの考えすぎじゃない?」

まあ、音姉の考えも分からなくもない。ルルーシユはいつも杉並と騒動を起こす時俺たちでは考えも及ばない策をいくつも講じてきた、それに音姉たち生徒会の面々は煮え湯を飲まさせてきた故のことなのかも知れない。

「うーん、そうだといんだけど・・・。」

結局音姉の考えすぎだということはこの話はここで終わった、しかし、俺は後日音姉の考えが正しかったこと知ることとなる。

悪虐皇帝とエピソード①

卒パが終わり数日後、渉からの電話で俺たちは商店街にある喫茶店に集まっていた。渉の呼びかけていつものメンバーが集まっていた。

しかし、ルルーシユだけが用事があると言って杏たちと途中で別れたそうさ。

杉並は当然の如く連絡がつかなかったにも関わらず集合場所に一番に到着していた。相変わらず謎が多いやつだ。

なので喫茶店にはルルーシユを除くメンバーが揃っていた。

「はあ、しっかしよ。やっぱり卒パのあの結果はよく悔しいよな。」

「渉君まだ言ってるの?」

渉がポツリと言ったことに小恋が反応する、まだ渉の中では卒パのことが悔やまれているようだ。しかし。

「もう終わったことでしょ?いつまでもぐずってないでいい加減切り替えたらどうなの?」

「うむ!雪村の言う通りだぞ板橋、過去に縋っているのは立派な男になれんぞ」

杉並と杏の言い分に渉も引き下がる。

まあ、渉が言いたいのも分かる。先日卒パでの磯鷲生徒会長の売り上げ一位のクラスに豪華賞品を贈るといふサプライズ。

俺たちはその豪華賞品を手に入れるためにあの手この手を使ってお客を呼び寄せたわけであるが色々あつて失格となつてしまった。

後から音姉に聞いたのだが豪華賞品の件に関しては生徒会主催だったらしく、俺たち付属二年は晴れて生徒会の定めていた失格ラインを越えてしまい失格となつてしまった。

今思い返してみても、豪華賞品は生徒会長が生徒会の予算を無断で削減し。貯めていたお金で購入したとも言つてたし。

それに気付けず、豪華賞品に目が眩んでそのことを失念していた俺たちの落ち度だ。

「んっ?」

「どうしたの義之?」

「あつ、いや。なんでもない」

俺の小さな声に気づいたのか小恋が反応するが、俺は何でもないと返事すると再び茜や杏たちとの会話に戻った。

そして俺は考える、あのルルーシユがこの事に本当に気付いていなかったのか?音姉の言葉を聞いた所為かルルーシユに対して疑い深くなつてる気がするな。

「あつ、ちよつとごめんね」

携帯の着信音が鳴り響く、音源は小恋の携帯からだつたようで小恋が断りを入れてから携帯を開く。

「あつ、ななかからメールだ」

「ななか？ ああ、白河か」

白河ななか、風見学園でその名前を知らない生徒はいないだろう。小恋とは幼少の頃からの付き合いらしくこうしてよくメールでやり取りしているようだ。

学園にいるときも直接会って話などもしているそうだが俺はその現場に居合わせたことが何気になかった。

「あつ、写真が添付してある。なんだろう」

「なになに、どんな写真なの〜?」

小恋の言葉に興味を引かれたのか茜が小恋の携帯の画面を覗き込んでいた。

「あつ、このワンピース」

「あーっ！このワンピース雑誌にも載ってたワンピースだ。」

どうやら送られてきたメールに添付されていた写真にはワンピースを着ている白河の写真の様だ。

茜のリアクションを見る限りでは着ているであろうワンピースは有名な物みたいだ。

「これってイズアスのワンピースだね、春限定の特別数量限定品の」

「うん、ななか。これ一目見て即購入予約したんだけどお金が足りな

かったみたいでどうしようって言ってたんだけど。」

「ふーん、でも着てるてことは買えたってことだね。もしかしたら卒パの売り上げ金で買えたのかもね」

「そうなのかな?」

小恋と茜の会話が耳に入る、特に何も感じるものはなかったのです。ルーしていると茜の隣に座っていた杏が顎に手を当てながら何やら呟いていた。

「あのワンピースは・・・もしかしたら・・・それに・・・まさか」

「杏ちゃん?」

「どうしたの?」

小声であっても隣に座っている二人には聞こえたのか杏に声を掛ける、すると。

「うふふふ、成る程そういうことね。やってくれたわね、うふふふ。」

「あ、杏ちゃん?」

「はわわわ、杏がこ、怖い」

「こ、怖えく。」

「ふむ」

「あ、杏?ど、どうしたんだ?」

「なんでも無いわよ、うふふふそう。なんでも無いわ」

いや、なんでも無い風には全く見えないんだが。今も黒い笑みを浮かべている為周りの客や店員が軽く引いていた。

するとそこに。

「すまない、予定より時間がかかってしまった」

最後のメンバーであるルルーシユが現れた、ルルーシユの登場に周りの女性客はルルーシユに釘付けになっていた。

こいつの挙動一つ一つはなんか無駄がないというかいちいち絵になるというか改めて思うが同じ人間なんだろう疑問に思う事が多々ある。

「あら、随分遅かったわねルルーシユ?」

ルルーシユがやって来た途端杏の表情が何処か険しく?いや、これはもっと別の何かだろう。

「な、なあ、月島。茜。義之。杏のやつなんかめっちゃ怖えくんだけど」

「そ、そうだね。いきなりどうしたんだろう杏ちゃん」

「は、はう。杏なんであんなに不機嫌なんだろう」

「杉並に至っては我関せずって感じで静観しているな、相変わらず凶太い神経してやがるな」

この後、ルルーシュが合流してから杏とルルーシュは互いに黒い笑みを浮かべながら終始会話をしていた。そのまま解散となったが非常に居心地が悪かった。杏は一体何に気付いたのだろうか？白河がワンピースを着た写真を見た時から急に不機嫌になったんだが。

そういえば白河ってルルーシュと同じクラスだよな？それに関係あるのか？いや、まさかな。俺の考え過ぎか・・・。

悪虐皇帝とエピローグ②

喫茶店から出て真っ直ぐ最寄りのバス停まで行く俺たち、杉並と義之と小恋とはここでお別れだ。

そして今俺たちはなんとも言えない雰囲気の中バス停に立っていた、まあ、原因を作ったのは俺であるが。

「そろそろ、話してもいいんじゃないかしらルルーシユ？」

「んっ、そうだな流石にこれ以上空気が悪くなるのは俺としても喜ばしくないしな」

「あら、その原因を作ったのが自分である事を忘れないで欲しいわね」

「ふっ、肝に銘じておこう」

「一応信じておいてあげるわ」

「フフフフフフ。」

「うわあ、杏ちゃんもルル君も物凄い悪い顔してる」

「おっおお、なんかあの笑みを見てると背筋にヒヤリとしたもんが……。」

そうこうしている間にバスがやって着たので取り敢えずは乗る事になった。

「さて、それじゃ。話してもらいましょうかルルーシユ。貴方卒パの裏で何をやっていたの？」

「ふっ、杏お前ならもう予想はついているだろう？」

「駄目よ。罪の告白は自分の口から告白するべきよ」

杏の有無を言わせない圧力に流石の俺も少し引く、残りの二人は既に顔を引きつらせており若干俺と杏と雰囲気困惑している。

「さて、そうだな。俺の計画は磯鷲生徒会長のあの宣言時から動き出した」

話し始める俺を杏と茜、渉は静かに聞いていた。

生徒会長の口から豪華賞品が贈られると聞かされまず俺は協力者を募った、真っ先に杉並が協力すると快諾してくれた。

俺たちの事だ豪華賞品を巡って争い合うのは目に見えていたし、豪華賞品がもし俺たちが求める様な物でなければ徒労に終わってしまう可能性もある。

なので俺は卒パの裏で売り上げベスト3のクラスを予想をするという賭けをした、この賭けに参加した者達は殆ど俺たち付属二年のクラスに賭けていた。

だが、今回の卒パでは生徒会が主権を握っている。俺たちのクラスは十中八九失格か営業停止などの処分を受ける可能性は大だ。

なので俺は事前の調査で上位を狙えるクラスをいくつかピックアップし準備期間の間密かに偵察し接客態度やら細かくチェックし候補を三つに絞った。

そして次はもう一人の協力者との話し合いだ俺が協力者もとい共犯者として選んだのが白河である、小恋から白河がワンピースを欲しがっているとの情報を得たのでそれを利用して貰った。

まあ、本人もかなり乗り気だったのが嬉しい誤算であったが。どうやら学園のアイドル様は根本的な所は俺たちと変わりない様だ。

協力の約束も得た彼女にやってもらう事は一つ俺がピックアップした三つの店の宣伝をしてもらうだけだ。

無論正体を隠してだが、態々白河に私物を持ってきて貰い学園内のトイレで着替えて貰った。その他の変装アイテムはこちらで用意した。

多少髪型や普段付けていない眼鏡などを付けるだけでも印象は大きく変わるものでバレる事はなかった。

こうして俺たち付属二年生は俺の予想通り失格になり俺が当たりをつけていた三クラスがトップを独占する結果になった。

裏で行われていた賭けも白河が上手く宣伝してくれたおかげで狙い通りの順位でかなり儲けさせて貰った。

「とまあ、こんなところだな」

バスの中では話終わらなかったなので結果俺の家で話す事になってしまった。

「ふふっ、やってくれたわねルルーシュ」

「ルル君てば私たちに黙ってそんなことしてたなんて、酷い」

「あんまりじゃねえーかよルルーシュ!!なんで誘ってくんなかったんだよー!」

こうして三者ともから色々言われたがこの日はこのまま解散となった、翌日この話を聞いたであろう義之と小恋からも苦言とお小言をいただいた。

そして何故か生徒会のお二人方からもメールと直接電話が来た、朝倉音姫からはメールで注意を。高坂まゆきは電話で次はぬつ殺すとの電話をいただいた。

まあ、次も勝つのは我々だかな。こうして俺の卒パは終わりを迎えた。

因みに。

「杏、お前いつ気付いたんだ?」

「ウチの部活の後輩と先輩が白河ななかそつくりの人と話したって自慢してたのよ」

「成る程その先輩と後輩の所属クラスが」

「そつ、一位と二位のクラスだったわ」

との事だった。やはり杏は勘がいい。

原作本編

悪逆皇帝と出店物の行方

クリスマスパーティー、通称クリパ。二学期最後のイベントであり、クリパが終わればそのまま冬休みに突入する。

因みに開催期間は二十三日〜二十五日までの三日間である。

俺たちも付属三年、来年はいよいよ本校生となるわけだが、今現在俺たち付属三年三組はちよつとした問題と直面していた。

クリパまでもう時間が無いというのに未だに何をするかが決まっていないのだ、その為現在我がクラス委員長である沢井麻耶が教壇に立つと。

「クリスマスパーティーといってもやる事は文化祭と変わりません、各クラス必ず出店するのが決まっています」

そこで一旦言葉を切ると。

「しかあし!!」

委員長が教卓を叩き教卓を叩いた音がクラス内に響いた、まあ、委員長が怒るのも無理はないか。

「残念な事に我がクラスは未だに出し物が決まっていません!」

「この議題、ロングホームルームで十一月からしているにもかかわらず!!」

委員長の怒号がクラスに響く、しかし、何も案が出なかったわけではない。女子生徒達が色々と提案していたんだがいつも話が逸れてしまい結局決まらず無駄に時間だけが流れ今日に至る。

俺たちは決まれば速いがそれまでに至るのが遅い、因みにだが俺や杉並なんかは最初の方は色々と案を出してはいたんだがことごとく委員長から不採用を頂いた。

沢井曰く「諸悪の根源であるあんた達の事よ絶対裏でなにかやらかすつもりなんでしょうが!!」

まあ、委員長の言い分は分からなくもない。なんせこのクラスには生徒会に目を付けられている超問題児が勢揃いしているのだから。

俺と杉並、そして義之に涉。そして杏と茜がこのクラスにいるのだ。沢井からしては堪ったものではないだろう。

唯一の救いはそんな委員長を小恋が気にかけて色々とフォローしていることぐらいか、小恋のフォロー無ければ今頃参っているだろう。

元凶の俺が言えたことではないだろうが。

ふと視線を左に向けると義之が寝起きの様な顔で少しぼーっとしていた、いや、恐らく先程まで本当に寝ていたのだろう。

口元が若干赤みを帯びているところを見ると頬杖をついていてバランスを崩し机に激突して目を覚ましたのだろう。

そしてそんな一部始終を見ていたのだろう杉並が。

「桜内、桜内・・・」

「んあ？」

「今日の委員長はいつにも増して気が立っている、居眠りなんぞしていたら永眠させられかねんぞ」

「マッチ棒かなんかで目蓋支えとけ」

「マッチ棒持って無い」

「んじやく、ほいシャーペン」

「おおーサンキュー、って飛び出るわ眼球飛び出るわ」

「くくくっ」

「にっししし」

渉のパスに義之がつっこむ、折角だ俺も乗らさせてもらおう。

「ならばこれを使えシャー芯だ長さも申し分ないだろう」

「おお、流石ルルーシュ渉より気が利いてるな。いや、脆いわ。ポキッと折れるわ」

おお、これも鮮やかに返してみせたか。乗りのいい奴だ。

「しかし、文化祭からまだ二ヶ月しかたっていないんだよな。文化祭でやりきった感があるから何も思いつかないな」

まあ、確かに義之の言い分もわからなくない。クリスマスパーティーと言つても内容は文化祭と大差は無い。

おのずと出展内容も文化祭と被るだろう、だが俺たち非公式新聞部からすればイベントが多いのに越したことはないんだがな。

「ちよつと、そこの悪の根源四人組！ちゃんと話し合いに参加しないならあんた達に決めてもらうからね！」

「四人組って・・・俺も入ってるのか？」

「当然でしょ、二人がボケであんた達がツツコミ。」

「いつの間にそんな役割に・・・心外だ」

「いや、妥当な判断だと思うぞ俺は」

「ルルーシユ、お前まで・・・。てか、お前も俺と同じ役割だからな！」

「ふふつ、ではいつそのこと四人ともボケということはどうだ？」

「そうだな、新しい世界が開けるかもな」

「収集つかんだろうが」

「だが、結局義之がツツコミにまわるはめになりそうだがな」

気が付くとクラス内が騒めき始めた、恐らく俺たちが騒ぎ出したからだろう。

その証拠に委員長が怒気の宿った目で俺たちを見ていた、その様子

は何時ぞやのカレンを彷彿させる程のものであった。

「静かに!!」

教卓を力強く叩いた音が響くと、教室内の騒めきも一瞬で静まる。みんなもこれ以上委員長を怒らせるのは不味いと判断したのだろう。

「今決まらなければ、放課後まで残ってもらうことになるけどそれでも良い?」

委員長のこの一言によりクラス内の騒めきは一瞬にして静まり返った、まさに鶴の一声というやつだろう。

流石に放課後まで時間を取られるのは俺たちも望む所ではない、俺たち非公式新聞部も活動がある。クリパの仕込みとかがな。

「人形劇・・・」

「んっ?」

「人形劇なんてどうかしら?折角のクリスマスだしファンタジーものなんてどうかしら?」

「な、成る程・・・。」

杏の提案に委員長だけでなくクラス中が関心を示す、すると。

「はい、はい、はい!!私も人形劇がいいと思います。」

「こうロマンチックなやつがいいんじゃないかなあ、聖夜を彩るラブロマンスなんてどうかなく。」

茜が色気を振りまく様にその身体を揺らす、その仕草を見た男子生徒たちは軒並み骨抜きにされて賛成の意を示す。

「俺も賛成だ!!」

渉、お前は本当に分かりやすいな。茜との付き合いも長いだろうに。何故こうも引つかかってしまうのやら。

取り敢えず杏の案は人形劇、杏は演劇部に所属している。シナリオの構想もあらかたできているそうだ、肝心の人形も裁縫が得意な茜がいるしなんとかなるだろう。

そして、杏は義之を主役にそして小恋をヒロイン役に推薦した。こういった所は分かりやすいなあからさまに小恋に義之中を取り持とうとしているのが丸わかりだ。唐変木の義之を除いてだが。

委員長もこの案には良い反応を示した、問題児の一人が大役を担えば厄介事が減ると考えたのだろう。

しかし、このまますんなり決まるなんて事は無くいまままで沈黙していた杉並が新たにお化け屋敷を提案してきたのだ。

結局杉並の提案であるが時間が無いため委員長も渋々といった様子で杉並のお化け屋敷の提案を飲む事となった。

協議の結果多数決を取る事になった、まあ、妥当といえば妥当だ。しかし、このクラスの生徒数は奇数だ。

その為もしかすると票が真っ二つに割れ、最後の一人の投票によって我がクラスの出店物が決まる。なんて事態に成りかねない。

まあ、余程のことがなければそんな事態に陥ることなど無いだろうが……。

今俺の目の前でその事態が起きている、人形劇とお化け屋敷とで票が真つ二つに割れているのだ。人形劇には主に女生徒がお化け屋敷には主に男子生徒が入っていた。

そしてどちらにも投票していない生徒は只一人、周囲の生徒も自然とその生徒に視線を向ける。

「桜内、早くしてくれない？」

「はえ？」

委員長に声を掛けられ義之が委員長を見る、そのまま義之の視線は委員長の背後にある黒板の人形劇とお化け屋敷の文字の下に書かれている両案同数の正の文字を見ると。

「嘘、俺の一存で決まるの？」

クラス中の視線が義之に向けられる、義之の左隣から杏からの無言の圧力と二つ前から杉並の意味深な笑みを向けられていた。

俺が同じ立場であつたら堪ったものではないが、それでも義之はしばし黙ると。

「俺は……お化け屋敷がいいな」

義之のこの一言により、残念がる声がいくつか上がるがそれも直ぐに収まる。切り替えの早さもイベント好きの風見学園生には必須の

ものだろう。

こうして我ら付属三年三組の出し物はお化け屋敷に決定した。さて、どうなる事やら。

悪虐皇帝と少女

さて、俺たちのクラスの出店物がお化け屋敷に決定し、これで心安かと思うが実際はそういう事は無い。

決定が遅れたせいで準備期間がその分無くなっていきかなりぎりぎりの状態なのだ、お化け屋敷をやる際に必要な物なども手配しなければならぬ。

まあ、提案者はあの杉並だ。その辺りは既にアテがあるのだろうかそんな心配はしてはいない。

その後、昼休みに何処かへ行った杉並と義之は昼休みが終わり帰って来たときは何処か興奮を隠しきれずにいる杉並と、頬が腫れくたかたになっている義之と。両者反する有様であった。

一体昼休みの内に何があったのだろうか？

そして現在俺たちは体育館にいた、今日は全校集会があり。風見学園全生徒たちは体育館に集められていた。

まあ、主な内容はクリスマスパーティーの事だろう。この時期になると毎年やっている事だ、代わり映えない説明会であるが今年は若干違っている。

その理由が現生徒会長である朝倉音姫である、容姿もさることながら成績優秀であり誰に対して平等に接する。

更には料理や家事も完璧にこなせる（義之談）これ程出来た人はなかなかいないだろう、そんな全校の憧れとも言っても良い人が生徒会長をやっているのだ。

そんな生徒会長だ、男女問わずの人気がある。そんな生徒会長に好意を抱かない男子がない筈もなく、本校、付属問わず朝倉会長を狙っている人は少なくない。

しかし、朝倉会長は本校生であり付属の生徒からすればなかなか直接御目にかかる機会は少ない。なので付属生にとって全校集会は又とない機会であるのだ。

『それでは皆さん楽しいクリスマスパーティーにしましょう』

そうこうしているうちにどうやら朝倉会長の話は終わっていた、終わると同時に朝倉会長が放った笑顔に至る所から男子生徒の深い溜息が聞こえてきた。

「はあく、やっぱいいよなああく音姫先輩く、ああーくそ！」

「痛って、何すんだよ渉」

前の方から渉と義之の話し声が聞こえてきた、いや、なにやら何かを殴った様な鈍い音も聞こえてきた。

義之の反応を聞く限り渉の嫉妬による攻撃を受けた様だ、先程も言ったが付属生が本校生と関わりを持つのは難しい。しかし、我がクラスには全男子生徒の憧れの的である朝倉会長と親しい関係にある人物がいる。

それが義之だ、家が隣同士で幼少の頃からの長い付き合いで俗に言う幼馴染というやつだろう。その為か義之は朝倉会長から弟君と呼ばれ可愛がられている。

付属の男子生徒たちからすると羨ましいとしか言えないだろう、その証拠に。

「うるせえ、お前はこれくらいあまんじて受ける義務があるんだよー」

渉のこの言葉に周りの男子生徒たちがとても力強く頷いていた、この反応を見る限りではどれ程の男子生徒が朝倉会長にご執心なのか
が充分にわかる。

しかし、いくらなんでも飢えすぎではないだろうかと思わなくもない。かつての俺たちのアッシュフォード学園でも此処までの熱気は無かったはず。

いや、あれだ。ミレイ会長の卒業イベントのキューピッドの日あれは凄まじかった。人気のある生徒は男女問わず大勢の生徒に狙われていた。

開幕直後に大勢の女生徒に襲われたのは中々に凄まじかった、口口の助けが無ければどうなっていた事やら。

そうこうしているうちに集会も終わり本日の授業も終わり俺は学園を後にした。若干一名男子生徒の集団に拉致られたが：まあ、大丈夫だろう。

帰る途中、俺は用を思い出しバス停で杏と茜と別れ俺は一人商店街を歩いていた。用というのは生活用品の買い出しだ。

現在両親は海外にいるため家の事は全て俺一人で行なっている、まあ、前世と幼少の頃から家事はやっていた事もあり苦ではない。

むしろ出来すぎて幼少の時両親に驚かれたりはしたが。

さて、目的の物も買えた。早々に帰宅するでしょう。

そうしてバス停の方に歩き出した俺はその途中に見慣れないものを視界に捉える。その光景に思わず足を止める。

それはこの寒い冬空の下商店街の端の方にひっそりと広げられていたレジャーシートに並べられている木彫りのおもちゃであった。

こういう言い方は悪いが今時木彫りのおもちゃとは珍しい、しかも丁寧な事に遠目から見てもそのおもちゃには尖ったり角ばったりしている部分が無く。

相手への思いやりの心が見て取れる、それらを見て俺はそこへと足を進める。

目の前まで来ると更に驚く事に販売している人物が俯いているが銀髪で小柄な女性であった。

「すみません、少し良いでしょうか？」

「えっ?」

俺に声をかけられ顔を上げる、その声は何処か驚きが混ざってたように聞こえた。更にルビー色の大きな瞳を見開かせていた。

「いきなりすみません、見ていつでも構いませんか？」

「えっ、ああ。うん! いいよ遠慮しないで見ていいよ」

そう言ったので俺は品物を手に取って改めて見る、子供が怪我をしないように角は全て丸く削られており、金属生のパーツなども一切使っておらず相手に対する配慮を忘れていない。

大手の企業でもこういう所を手間だと言って削らずそのままという事も珍しくないと言うのに、恐らく制作者である彼女の優しさが伺える。

「ねえ、君。その制服って風見学園のだよね？」

「ええ、はい。そうですがもしかして貴方も？」

「うん、そうなんだ。あつでも風見学園にいたのはほんの少しだけだったんだけどね」

俺がおもちゃを見ていると女性の方から話かけてきた、それに驚いた事に彼女も風見学園の生徒だったそうだ。

これも何かの縁なのかもしれないな。

「すみません、これ一つもらえますか？」

そう言つて俺は木彫りの馬？いや角らしき物が頭に生えている為恐らく鹿だろうを手取る。

「えっ、いいの？」

「ええ、一目で気に入りましたこの鹿？のおもちゃ。」

「ああ、これ鹿じゃなくてトナカイなんだ」

「そ、そうですか。ああではお願いします」

何となく空気が悪くなってしまったので早々に会計を済ます、値段が思ったより安かったのは驚いたが。この出来であればもう少し高くても良いと思ったのだが。

「ああ、そうだ。折角なので名前教えて貰っても宜しいですか？これも何かの縁だと思うので」

「えっ……うん、良いよ。でもこういうのはやっぱり訪ねてきた方がらだよな？」

少しいたずらっぽい笑みを浮かべて言ってきた、しかし、確かにそうかもしれないな。

「ルルーシュ・ランペルージです、今は風見学園付属三年生です。」

「私はアイシア、一応ルルーシュ君の先輩OBになるのかな？」

互いの自己紹介を終え俺はアイシアさんの元を後にする、別れの際アイシアさんが。

「またね？ルルーシュ君」

そう言ってきた、俺はそれに普通に返した。がその時俺は別れ際のアイシアさんの表情が酷く脳裏に焼き付いた。

只の別れの挨拶に何故彼女はあそこまで悲しそうな、今にも泣き出しそうな顔をしていたのだろうか。そしてまたね？あの言葉に込められていた感情は一体何だったのか？

釈然としないものを感じながら俺は今度こそ帰路についたので
あつた。

悪逆皇帝と賢妹？

さて、我がクラスの出し物がお化け屋敷に決定して数日、特別何かあったわけではないが休日には杉並と共に学園で仕込み作業を行ったくらいだ。

そして休み明けの月曜日俺は一人通学路を歩いていた、杏は演劇部の朝練、茜は単純に寝坊。

その為俺は一人通学路を歩いていた、まあ、偶にはこういうのも悪くない。しかし最近めつきり寒くなってきた。

この調子ならもしかするとクリパ当日には雪でも降るかもしれない、そうなるとうホワイトクリスマスになる訳だ。中々ロマンチックな事だ。

そんな事を考えながら歩いていると前方に見慣れた四人の姿を捉える、それを見た俺は自分でもわかるくらい悪い笑みを浮かべながら四人に近づいて行く。

俺が近づいていく、するとまずは三人が俺の姿を見ると驚いた表情を浮かべる、そしてその三人の表情を見た残りの一人が後ろを振り返る。

そして俺を視界に捉えた瞬間には好戦的な笑みを浮かべる。それに答えるように俺も笑みを浮かべ四人に近づく。

「おはようございます、会長。副会長。朝からクリパの相談ですか？」

「おはようルルーシユくん、ええ。御察しの通りクリパについてまゆきと話してたのよ。弟くんの友達に困った問題児さんたちがいるか

らね。」

こちらの問いかけに対して笑顔で答える会長、流石である。

「そうですか、運営側としては目の上のコブといったところですか。大変ですね運営する側としては。」

「ふふっ、そうね。その運営する側の苦勞を分かってくれたらいいんだけどね。再三言っても聞いてくれないの。どうしたらいいと思うかしらルルーシユ君？」

「そうですね・・・辛抱強く説得する事ですかね？誠意を見せれば相手も応じてくれるのではないのでしょうか？まあ、俺の考えですが。」

「そっかあ、だったら今度からはそうしてみようかしら？アドバイスありがとうねルルーシユ君。参考にしてみるわ」

「いえいえ、こんな俺の在り来たりなアドバイスがお役に立てれば光栄です。では俺はこれで失礼しますね？」

「ええ、ありがとうねルルーシユ。」

「どういたしまして。」

「ふふふっ・・・。」

会話を切り上げ、俺は先を歩き出す。その際チラリと生徒会長以外の面々に視線を向ける。

副会長は、普段より数段好戦的な笑みを浮かべて俺を見ていた。義之は引きつった表情で俺と生徒会長を見ていた。そして生徒会長の

妹である朝倉 由夢は義之と似た表情をしていたが一つだけ違うところがあつた、それは……。

何故かその目に怯えや困惑といったものを俺に向けていたことだ、俺と彼女はあまり接点は無い、なのであのような目で見られる様な事をした覚えはない。

こればかりは俺も首をかしげるしか無い、知らず知らずのうちに何かしてしまつたのだろうか？

しかし、考えても答えは出ず俺は思考を切り学園に続く通学路を歩く事にした。後ろから感じる視線を無視しながら。

「ふう〜、やっぱりルルーシユ君は一筋縄じゃないわね。流石に手強いわ」

「全くね、面の顔の厚さで言ったら杉並並みかそれ以上ね。あいつ政治家とかに向いてそうね。」

「いや、音姉。いきなり往来であんまり心臓に悪い事しないでくれよ。見てるこつちはヒヤヒヤしたよ。」

「あはは、ごめんね弟君。ここのところルルーシユ君にやられっぱなしだったからつい、ね？」

「いや、可愛く言われても……。」

兄さんやお姉ちゃん、そして高坂先輩の会話を他所に私、朝倉 由夢はルルーシユ先輩の後ろ姿をただ見つめていた。

はつきり言つて私はルルーシユ先輩が怖い、いや、だからといってルルーシユ先輩に何かされた訳では決して無い。これは私自身の問題だ。

私、いや、私たち朝倉家の人は大多数の人が魔法が使える、おじいちゃんも亡くなったお母さんも。そしてお姉ちゃんや私も。

そしてわたしがルルーシユ先輩に恐怖心を抱く理由を作ったのも私の魔法が原因である。

私の使える唯一、というか私自身も自由にその魔法が使えるわけでは無い。それは予知夢だ。私の予知夢は決して外れる事はない。

そんな絶対外れない予知夢に現れた例外がルルーシユ先輩である、私は見た夢を毎朝手帳にメモをしている。

兄さんはこれを、私自作のポエム手帳と勘違いしている。まあ、そんな事はどうでもいい。

ある日私と兄さんが一緒に通学していると、目の前から親子連れが歩いて来た。その光景を見て私は小さく「あつ。」と声を出す。

私の今朝見た夢で親子連れの子供が走り出してその先に居た兄さ

んは子供を避けるが避けた先にあつた石を踏んづけて転んでしまうのだ。

そんな私を他所に事態は進み既に子供が兄さんのすぐ近くまで来ていた、そして次の瞬間には。

「足元注意だぞ義之。」

いつのまにかいたルルーシユ先輩が兄さんの制服を引っ張つていた、あれ？

「おつ、サンキュルルーシユ。うわ。なんかデカイ石ころが足元にあんだけど。」

「それを踏んでいたら転んでいたな。」

兄さんとルルーシユ先輩が何か話しているが私はそんな会話を気にする余裕は無かった。今まで一度も外れたことの無い私の予知夢が外れたのだ。

その後も偶に見る予知夢だったけど何故かルルーシユ先輩だけが予知夢に現れなかった、けど見た予知夢に居なかった筈のルルーシユ先輩がいる事が多々あつた。

その時初めて私はルルーシユ先輩に対して恐怖心を抱いた、魔法という普通では無い力を持つてしても理解できない存在。

私の中ではルルーシユ先輩は得体の知れない存在となっている。

(ルルーシユ先輩って何者なんだろう?)

そんな答えの出ない疑問を抱きながらも私は日常を送る、叶う事ならこの疑問が解決する事を願う。

悪虐皇帝と留学生

今朝方生徒会の面々とのあれこれがあったが特に何かあるわけもなく平穩無事な学園生活を送っている。

まあ、その平穩無事な学園生活を自ら壊そうと今しているわけだが。

少々大袈裟に言っているが要するに生徒会に喧嘩を売りに行くわけだ。

非公式新聞部の情報網によってある情報を入手したのだ、その情報自体はもう随分前から入手していたんだが。

その情報というのが海外から留学生が来るという話だ、しかもただの留学生ではなく王女であるらしい。

何故どこぞの国の王女様がわざわざ日本の小さな島の学園に留学してくるのかはわからないがどういった人物なのかこの目で見せてもらおうとしよう。

生徒会の巡回ルートは頭に入っている、恐らく朝倉先輩と高坂先輩と案内ついでに校内を回っているだろう。

二人を探して校内を歩いていると。

「――君――紹―――する」

「留学――エリ―――サキ―――ん―――よ」

少し離れた所から聞き慣れた声が聞こえて来た、聞こえてきた言葉

から推測するにどうやら誰かと話をしている様だ。

声の方に向かって歩いていけると予想通り朝倉先輩と高坂先輩がいた、そしてその後ろに件の留学生エリカ・ムラサキがいた。

金髪ロングに凜とした佇まい、後ろ姿からでもわかる隠しきれないオーラというやつなのだろう、上に立つ者としてのカリスマ性も感じる。

これはもしかすると中々良い人材か生徒会に入ったのかもしれない、まあ、負けるつもりはさらさらないがな。

後ろから様子を伺っていると不意に。

「あつ、」

「んっ。」

顔を背けたエリカ・ムラサキと視線がぶつかる、ムラサキの声に反応して朝倉先輩と高坂先輩が顔を後ろに向ける。

その際義之の顔が見えた、どうやら先ほどの会話は義之としていたようだ。

そんな事はさておき、俺の姿を捉えた朝倉先輩と高坂先輩の表情が変わった、和かな笑みを浮かべているが何処か凄味を感じる笑みを浮かべている朝倉先輩、獰猛な笑みを浮かべて獲物を狙うかのような目をした高坂先輩。

そんな二人が俺の方に歩いてきた、そんな二人の様子を見て何かを感じたのかムラサキも後に続いて近づいて来た、ついでに言う義之

もおおずおおずと付いてきた。

「おんやあく、こんなところでなあにしてるのかなあく。ルルーシユ？」

「なに、生徒会に新戦力が加入したと聞き及んだので。一応偵察を」

「ふーん、まあ、いいか。丁度いいと言えば丁度いいか。エリカちよつと来て」

「は、はい。」

高坂先輩に呼ばれムラサキが高坂先輩の隣まで来る。

「エリカちゃん、この人が生徒会のブラックリストに載っている最要注意人物のルルーシユ・ランペルージ君よ」

「っ！つまり私たちの敵という事でよろしいんですね？」

朝倉先輩の言葉にムラサキは好戦的な目を俺に向けてきた、高坂先輩と同類か。いやこれは少々気合いが入り過ぎているな。

真面目なのはいい事だがどこか猪突猛進なイメージだ、勇のは結構だが俺たちを相手するのはまだ経験不足だな。

まあ。有益な情報は得た。今日の所はこの辺で失礼するでしょう。

「時間も無い事ですしそろそろお暇させていただきます、では。」

生徒会の面々の視線を尻目に俺はその場を後にする、生徒会の面々の鋭い視線そして義之の恨めしそうな視線を感じながら。

「今朝も思っただけどあいつのあの余裕の表情ムカつくわね、いつか必ず悔しさに歪ましてやる」

「うーん、やっぱり手強いわねルルーシユ君は今回も彼の動向から目を離さないようにしないと。」

俺の目の前で音姉とまゆき先輩がルルーシユに対する対策やら話し合いが行われている、これを見るとやっぱりルルーシユって凄いやつなんだな、と実感する。

そんな風にぼつとしていると不意に腕を引かれる。

「うお?！」

いきなりの事で驚いて体制を崩そうになるもなんとか堪える、俺の腕を引いた犯人を見る。そこには……。

「ム、ムラサキ?！」

出会い頭にやらかしてしまった相手ムラサキであった。

「本当は貴方に聞くのはとても不本意なんですけど、朝倉先輩や高坂先輩の手を煩わせる訳にもいきませんから貴方に尋ねます。」

「な、何をだ？」

ムラサキは咳払いをひとつすると。

「あのルルーシユという男はその、貴族かそれに連なる家系の人物な
のですか？」

「へっ？」

予想斜め上の質問に思わず間抜けな声が出る、ルルーシユが貴族？
いや、確かにあいつの言葉遣いや立ち振る舞いはどこか品があった。

改めて考えるときもしかしたらそうなのかも、と思ってしまう。だが
しかし。

「いや、ルルーシユの両親はごくごく普通の一般人だぞ。でもなんで
そんな事聞くんのだ？」

「そうね、その話私たちも興味あるわね」

「うお!？」

いきなり後ろから声をかけられ為声を荒げてしまふ、後ろを見ると
案の定というかそこには音姉とまゆき先輩がいた。

そんな二人の視線にムラサキはぽつりぽつりと語り出した。

「その、彼の所作や立ち振舞いが見慣れたものでしたので」

「見慣れた？って」

「はい、あれは私達と同じ王族や貴族に連なる者としての振る舞いや所作が染み付いていました」

「染み付くか・・・まあ、エリカが言いたい事はわかったわ。」

ムラサキの言葉を理解したのかまゆき先輩は納得した様に頷いていた、それに対して俺と音姉は首を傾げていた。染みつくってどういう事だ？

そんな俺たち二人の様子を見てまゆき先輩は。

「あー、弟君や音姉にはわかりにくいか。ほら、私陸上やってるでしょ？」

まゆき先輩の問いに俺と音姉は頷く。

「まあ、陸上に限らずスポーツなんかやってると分かるんだよね。雰囲気というか、一目見ただけで相当走りこんでる、とか。」

「うーん、御免うまく言葉で説明できないや」

たはは、と笑うまゆき先輩であったがなんとなくまゆき先輩の言いたい事はわかった。要するに同じ分野の一流の人同士ならわかる感覚みたいなのやっだろう。

となるとますますわからないのがルルーシユである、本物の王女様であるムラサキが認めた。それはつまりそういう事になるんだろう。

けれど俺は知っている、ルルーシユの家族や出生の事も。けどそれが逆に自体の混乱を招いている。

杉並の様に徹底的なまでの秘密主義者であれば一応の納得はできる、けどルルーシュは違う。あいつはある程度個人情報があるからこそこの違和感は無視できない。

だけど結局、色々考えてみたが答えは出ず。予鈴が鳴り音姉たちと別れ俺は自分のクラスに戻った。

ルルーシュ、杉並では無いがこいつにはなにかとんでもない秘密を抱えているのかもしれない。

悪虐皇帝と怪事件と

生徒会の新人であるエリカ・ムラサキの偵察を終えたその日の放課後。俺たちのクラスのクリパの出し物、お化け屋敷についての話し合いの時間がやって来た。

進行は発案者である杉並が行なっている、普段なら有り得ないと思える光景だが今回は特別だ。

担任もことの成り行きを黙って見ていた、委員長は不満げな表情を浮かべながら杉並を見ていた。

委員長からすれば杉並が真面目に司会進行をやるとは思えないのだろう、いや委員長に限らず大体のクラスメイト達もそう思っているだろう。

まあ、結果的に話し合いは話題が時々横にそれたり杉並の発案に委員長が突っ込んだりして時間は掛かったが。お化け屋敷についての話し合いは無事に済んだ。

なお、杉並考案のライド式お化け屋敷は好評ではあったが委員長の判断により却下された。何せ値段が値段だからな。

ちなみにだが、次からは杉並は来ない。計画の準備を進めてもらわなければならないからな。次回からは俺が進行役を行う事となっている。まあ、だからと言ってお化け屋敷の準備の方も怠らず杉並は杉並で準備をするそうだ。

本格的な準備は明日からになる、なので今日はこのまま下校となる。

学校を後にした俺はそのあしで商店街へと足を運んでいた、以前の様な個人的な買い物ではなく食材や調味料を買い足しに来たのだ。

今朝無くなりかけている調味料や食材が有るのに気付きこうして買いに来たのだ、商店街は多くの人々で賑わっていた。

ここの商店街は店舗の種類もとても豊富だ、本屋や喫茶店に服屋は勿論のこと。CDショップや楽器屋、スポーツ用品を扱っている店。

更にはゲームセンターやお手伝いロボットムの販売店なんかもある、ここに来れば大体なんでも揃うので商店街は多くの人で賑わっている。

現在の時刻は既に夕方、そのせいか主婦の方々が目に付く。この時間ならスーパーでタイムセールが行われる時間だ。おそらくそれ目当ての方々だろう。

タイムセール品を横目に俺は目的の物を買った物籠の中にいれていく、目的の物入手すると俺は真っ直ぐレジに向かう。

やはり夕飯前の時間であるせいかレジはちよつとした列が出来ていた。そこそこの時間は掛かったものの無事に買い物を済ませ商品を袋に詰めていると。

「ねえ、聞いた？昨日また車の事故があったらしわよ？」

「嘘、もう今月に入って何回目？嫌だわ。私達が若い頃はこんな事故なんて全然無かったのに。」

「本当にね、しかもまた原因不明らしいわよ？怖いわね、こんな事いつまでも続いたら堪らないわね。」

隣の主婦の会話を横目に俺はその場を後にする、先程二人の主婦の会話でもあった原因不明の事故。

これは俺が物心ついた頃からこの初音島で頻繁に起こるようになったそうだが、例を挙げるとキリが無い。

車の事故や看板が頭上から落ちて来たり、いつ死人が出てもおかしくない事が起きているにも関わらず、怪我人は出ているが死人はいまだに出ていないそうだが。

それはそれで不思議でならないが、事故の原因も不可解なものや不明なものがあるというのも噂が広がる一因となっている。

平和だった初音島でこれ程事件が頻繁に起こるのだ注目されないわけがない。まあ、今までが平和すぎた、というのもあるが。

俺たち非公式新聞部もこの件に関しては日夜調査を続けているが結果は芳しく無い、せめて法則性などがあればよいのだが。

被害者などに共通するものも特になく年齢、職業に出身地に至るまで法則性なども無く。言ってしまうえば完全に手詰まりだった。

それでも諦めずに事件の真相を探ろうと動いている部員たちも大勢いる、杉並もそうだがこういった怪事件好きな奴ばかりだな非公式新聞部は。

前世の記憶を持っている俺も大概な存在であるが。

買い物も無事に済ませバス停に向かう、そこでふと先日出会った露店の彼女を思い出す。あの見た目で俺たちの先輩だということのだから

驚きだ。

商店街の一角、そこに彼女は今日もいた。並べられている木のおもちゃはあまり売れていないようだ。

人が多いこの時間、にも関わらずその露店に足を止める者、様子を見る者が誰一人として居なかった。まるでそこだけ認識されないように。

そんな事を考えながらも俺はその露店に近づき、店の前に立つ。アイシアさんは俺が近づくと顔もずっと顔を伏せたままでおそらく俺の存在に気づいて居ないだろう。

ここまで近づいても気づかないとは、まさかとは思うがこの寒空の下寝ているのでは？と思ったが、見た感じそうでもない。

ただ俯いているだけであった、ここまで気付かれないとは。流石にここまで来てさよならわ味気ない。なので。

俺は鞆の中にしまっていた未使用のカイロを取り出すと、アイシアの顔にカイロを当てると、すると。

「ひゃあああ!!な、何?! ってルルーシユ君?」

「ええ、昨日ぶりですねアイシアさん。」

「う、うん。って、いきなり何するのよ。ビックリしたじゃないもう!」

「すみません、店の前まで来たのに全然気付いてくれませんでしたのでつい出来心で。」

「もう、普通に声を掛けてくれれば良かったのに。それで今日はどうしたの。私に何か用かな?」

「いえ、これといって用はないのですが最近原因不明の事故が多発して物騒ですからね。会って間もないと言っても心配でしてね」

「そうなんだ、ふふつ。ルルーシユ君は紳士だねえ。でも大丈夫だよ心配してくれてありがとうね。」

そう言ってアイシアさんは笑みを浮かべた。まあ、他人の俺があまり干渉しすぎるのも良くないか。まあ、一応。

そう思い、俺は鞆から追加のカイロと手袋を取り出すと。

「気休めにしかならないかもしれませんが良かったら使って下さい」

そう言ってアイシアさんに手渡す。手渡された物を見てアイシアさんは。

「えっ、悪いよ。カイロならさつき私に使った奴だけでいいし、それにその手袋はルルーシユ君の物だし。」

「いえ、問題ないですよ。俺はバス通学ですから。マフラーとカイロが有れば事足りみますので。手袋は念の為持ち歩いているだけなので。」

「うーん、でも・・・。」

「遠慮しなくてもいいですよ?カイロは兎も角手袋はまた今度会った時にでも返して貰えばいいですね。」

「っ!!」

何気なく言ったこの言葉にアイシアさんの表情が曇る、しかしそれもほんの一瞬だけで直様いつもの表情に戻る。

「そ、そうだね。初音島は広い様で狭いし何処かで偶然会うこともあるよね。と言うわけでこの手袋はその時まで私が預かっておくね。」

「ええ。お願いします。おっとそろそろバスの時間ですね。」

商店街に設置してある時計を見るともうすぐ帰りの方のバスが来る時刻が迫っていた。

「では。俺は失礼しますね。」

「うん、バイバイルルーシユ君。風邪には気をつけるんだよ?」

「アイシアさんこそお気を付けて。ではこれで失礼します。」

俺はアイシアさんに別れの挨拶をするとバス停へと向かって行っ
た。

「今度会った時か・・・今度会った時君は私を覚えてるのかな。」

去って行くルルーシユ君の後ろ姿を眺めながら私はそう呟く、もう何度目になるか分からないくらいしたやり取り。

また今度、この言葉は今の私にとっては結構きつい言葉だったりする。けどこれは私の招いた事。私の過ち。私への罰。

魔法という奇跡を信じ過ぎた純粹過ぎた私の失敗。

私はルルーシユ君から借りた手袋をおもむろに着ける、うん、温かい。

その温かさ何処かで心にもくるものだった。

悪虐皇帝とクリパ準備

翌日、午後の授業はクリパの作業の時間になった、我がクラスにとっては初めてのクリパの本格な作業となる。

俺は教壇に立つと教室を見渡し。

「さて、クリパ本番まで残り時間はごく僅かだ。そこでこれを見てほしい」

俺はそう言って黒板に凶面を広げマグネットで固定する、凶面の中身は当日のお化け屋敷の見取り図である。

「これを見て分かるだろうが作業範囲を幾つか区分けして表示している、グループは既にこちらで勝手に分けてある。」

その言葉でクラス内が少し騒がしくなるが効率よく作業を進める為には致し方の無い事だ、グループ表を貼り出すと俺は再びクラスメイト達に目を向ける。

「このグループが、俺が考えるに最も効率良く作業を進ませれるグループだ。多少の不満はあるだろうが今は飲み込んで欲しい。」

「さて、ここまでで質問がある奴は居るか？」

そう言ってクラスを見渡し、すると。

「んっ、なんだ義之。」

恐る恐ると手を挙げている義之がいた。

「なあ、ルルーシユ。グループ分けするならグループ内でリーダーとか決めなくて良いのか？」

義之と同意見なのかコクコクと数名が頷いていた。

「リーダーは敢えて指名してない、グループ内で変に序列を作るのは後々面倒なことになりかねん、それに……。」

「それに？」

「この程度の人数を管理統括がこの俺に出来ないと思うのか？」

「あー、いや、問題ないかな」

ほぼその一言で決着がついた、クラスの他の面々を見た限りでは義之と同様に納得してくれている様だ。

「さて、後は資材についてだが……。」

その後細かな指示や連絡事項の後に俺たちは作業に取り掛かった。

「ルルーシユがああやって指揮とってるのに結局誰も何も言わなかったな」

「まあ、ルル君だからね。昔からあんな風にいつの間にかリーダー的なポジションに着いちやってたりしてたしねえ。」

「昔からあんな感じだったのかルルーシユって？」

「まあ、そうだね。気付けばクラスの中心にいてあんな風に指揮したりしてたよ。そんな事よりほら義之君喋ってばかりじゃなくて手も動かしてね。」

ルルーシユの指揮の元俺たちはルルーシユが組分けした班で纏って作業を行っていた。俺と茜は同じ班だ。

ちなみに渉と杏が同じ班であり、班ごとに別れる際に杏はとて小さな声でこう呟いていた。

『奴隷ゲットね。』

その言葉通り現在渉は杏に奴隷の様にこき使われている、側から見ても可哀想に思えてくるくらいにだ。

杏と渉と同じ班のメンバーも引いていた、そんな周囲の視線も杏はスルーしていた。相変わらず肝が据わってるやつだ。

そして残る小恋はというと。

「はあ、なんでうちのクラスには毎年毎年問題児がいるのよ……。私は真面目に慎ましく学園生活を過ごしたいだけなのに。」

「ま、まあ。委員長落ち着いて。えーと、その、うーん。」

「はあ、月島さん無理に慰めようしなくていいわよ。はあ、こうな

るって事は予測できてた筈なのに何もしなかった私も悪いもの。」

「あははは、委員長相変わらず苦勞してるんだね。」

「そうなのよ、毎年毎年最低でも二人は生徒会がマークしてる問題児がウチのクラスにいるのよ。」

「それが今年に至っては全員集合よ!!なんでこんなクラスになったのよ!!普通に考えれば駄目でしょ!!合わせちゃいけない連中を一纏めにしたら。」

「はわわわ、い、委員長落ち着いて。ほ、はら深呼吸して、深呼吸。」

「私がなにをしたっていうのよーー!!」

委員長がいつにも増して荒れている、あれをフォローする小恋も大変だ。俺が同じ班なら理不尽な怒りをぶつけられていたに違いない。

「うわあゝ、荒れてるねえ。」

「あの状態の委員長のフォロワーの為に小恋と同じ班にしたんだろうなルルーシユは。」

やることなす事は杉並と同様にthe問題児であるが杉並と違いフォロワーとかはきちんとするんだよなルルーシユは。

まあ、それでも杉並と負けず劣らずの問題児ぶりを発揮している為プラマイはゼロになっているが。

ルルーシユの場合普通にしていれば普通に優等生で通るんだけどな、なんだって好き好んで杉並とつるんでいるのやらだ。

ルルーシユの話題で盛り上がっているとふと以前ムラサキが言っていたことを思い出した。

『貴族に連なる人物なのか。』

王女であるムラサキが言ったこの言葉、ルルーシユ本人に直接聞けば良いんだろうが。中々切り出せずにいる。

(そもそもまともに答えてくれそうにもないんだよなあ。)

普通に聞いてもルルーシユの事だから本当のことを言ってたとしても何処までが本場で、何処までが嘘なのか俺じゃ解らないからな。

(なんか、聞いても無駄な気がしてきたな。)

結局俺はその事で悶々としながら作業をする事となった、途中まゆき先輩とムラサキが杉並を探しにやって来たがルルーシユの挑発まがない言葉を聞きながら帰って行った。

その時のまゆき先輩とムラサキの顔を俺は決して忘れないだろう、というか何故か俺まで睨まれたんだが。ホント勘弁してくれルルーシユ。

悪逆皇帝の知らぬところで

現在俺、桜内義之の目の前には三人の人物居る。一人は音姉こと朝倉音姫である。ここまでは良い。

音姉は分かる、幼少の頃から付き合いだし今俺がお世話になってる風見学園理事長である芳乃さくらさんの家と音姉の家はお隣だし、ほぼ毎日夕食も一緒に作って食べてるし。音姉がここに居てもなんら違和感はない。

なんなら居ない方が逆に違和感を感じるほどである。

だが問題は後の二人だった、一人は音姉の友人にして生徒会副会長であり風見学園陸上部のエースである高坂まゆき先輩。

そしてもう一人は転校生であり付属一年でありながらもその能力を認められて生徒会メンバーとなったエリカ・ムラサキであった。

(なんでこの二人がここに居るんだ?)

ちよつと早めに夕食の準備に取り掛かっていたらいつもの様に玄関から音姉の声がしたので出迎えようと玄関には音姉だけで無く後の二人が居たのである。

何故家に?という疑問は音姉の言葉で解消された。曰く秘密の作戦会議だそうだ。

因みにいつもならこの時間に我が家の居間の炬燵でダラダラ過ごしている妹分である由夢はいない。

(音姉から知らされていたか、勘づいたかは分からないが逃げたなア

イツ。)

そんな薄情な妹分に内心愚痴をこぼしながら俺は目の前の現実向き合う事にする。

「なあ、音姉作戦会議って言ってたけどそれってもしかしてクリパに関するものなのか?」

作戦会議と言ったらもうこれくらいしか思い付かなかった、まあ、うちの学園にはとびっきりの問題児が二人もいるしな。

その二人共と友人である俺はいつ巻き込まれるか心の中で冷や冷やしているが。いつも問答無用で巻き込んでくるからなあ。の二人。

「うん、そうだよ弟君、大正解。」

俺の言葉に音姉は笑顔で答える、やっぱりか。と思うと同時にいやな予感もする。

「そっか、じゃあ。俺はお邪魔みたいだし部屋に戻ってるよ。終わったら教えてくれれば良いからさ。」

この場から逃れるため俺は適当な理由を付けてその場から去ろうとする、しかし。

「弟君、そこに座って」

「えっ、いや。生徒会の会議なんだろう?俺が居たら邪魔だろうし……。」

「弟君、良いからそこに座って」

「いや、だから。俺が居たら会議にならないだろうしき。」

「弟君そこに座って？」

「……。」

「……(ニコニコ)」

「……わかりました。」

「うん！素直でよろしい。」

音姉の笑顔の圧力に屈した、高坂先輩な面白がって終始ニヤニヤしながら成り行きを見守るだけだったし。

ムラサキは少し戸惑った様子で俺と音姉を交互に見ていた、助け船を出してくれてもよかったんだが。

結局俺も音姉達生徒会の作戦会議に無理矢理参加させられる事となった、明らかに場違いだろうに。

「さて、今回の議題も非公式新聞部。もとい杉並君、ルルーシユ君に対する対策会議を行いたいと思います」

「やっぱその二人なんだな」

「そりやそうでしょう？イベントが近付いてる風見学園において必ずと言っていい程騒ぎを起こす連中のトップよ？」

「そうですわね、私も生徒会の資料でしか拝見致しておりませんが、相当な事をやらかしておいででしたわね」

心なしかまゆき先輩とムラサキが俺に突き刺す様な視線を向けてくる、まあ。俺も去年までは俺も騒ぎを起こす側の人間だったからな、警戒してもおかしくないだろう。

「大丈夫だよ、弟君はもうそういう事は卒業したって言ってたし。ねっ?」

音姉が笑顔で俺にそう尋ねてくる、先程の威圧感を感じる笑顔ではなく今度は純粹無垢なものであった。

二人とは違い本当に俺を信頼してくれているという事なんだろうな。

「もう、音姫はそうやって直ぐに弟君を甘やかす。油断しちゃ駄目よ音姉。」

「そうです、この問題児が素直に言う事を聞くとは思えません。しっかりと監視下に置るか釘を刺しておくべきですわ」

まゆき先輩とムラサキからは残念ながら信用されてないみたいだ、あとムラサキはかなり辛辣であった。まあ、ファーストコンタクトがあれじゃあそうもなるか。

まゆき先輩はもう少し俺の事を信用しても良いと思うんだが・・・、上手くないかないものだ。

「まあまあ、二人とも弟君の事は私に任せて。後でちゃんと言っておくから。それよりも会議を始めましょう」

「それもそうね、じゃ、最初の議題は」

こうして始まった対非公式新聞部の秘密の会議、当日の警備の生徒の配置や重要度の高い場所や位置の予測や要注意人物である二人の動向や狙いの予測。

側から見ても音姉もまゆき先輩も真剣そのもの、ムラサキも若干二人の気迫に圧倒され気味だ。

この二人は今の生徒会の中では杉並やルルーシユとは長く因縁深い間柄である、付属一年の頃から精力的に非公式新聞部として暗躍し続けた杉並とルルーシユ。

そして当時付属三年でありながら本校の生徒会に特別参加していた音姉とまゆき先輩。その頃から問題児二人には良い様にやられていたみたいだ。

それに音姉とまゆき先輩も来年は三年生だ、生徒会として活動も残り僅かになってきた。二人共と在学中には一度でもいいからルルーシユ達に勝つ事を目標にしているそうだ。

「ふう……。今の段階で考えれる事はこれくらいかな？」

「そうね、まだクリパまで時間は有るから何か発見したらその都度報告して対策を練るって感じよね」

「ふふっ、つまりはいつも通りって事ね。」

二時間弱に及ぶ会議もようやく終わりを告げそうだ、結局最後まで居座らされたがこの会議の内容俺が聞いてても良かったのだろうか？

そんな疑問を浮かべていると。

「あの、発言よろしいでしょうか？」

ムラサキがおずおずと手を挙げた、どうしたんだ？

「ん？どうしたのエリカちゃん。何処かわからなかったところでもあった？」

「あつ、いえ。そういう訳では無いのですが。お二人はどうして非公式新聞部の本拠地に乗り込むという選択をなさらなかったのでしょうか？」

おおっと、これは。

「普通に考えれば彼等の本拠地である部室を抑えるのが騒動を収めるには確実な方法だと思うのですけれど。」

「お二人は何故先程の会議でその案を出さなかったのでしょうか？」

ムラサキが疑問を持つのも無理は無い、普通ならそうするだろう。しかし、良くも悪くも普通とはかけ離れた部活である非公式新聞部にはこの方法は使えないのだ。それよりも。

「あれ？音姉とまゆき先輩。あの事はムラサキに言ってなかったの？」

「あー、そういうば言ってなかったわね。すっかり忘れてたわ」

「あはは、私もすっかりしてたよ。」

音姉とまゆき先輩がそう言う、その様子に訳がわからないと困惑する表情を見せるムラサキ。

「えっとね、エリカちゃん。エリカちゃんのその考えをそのまま実行した人が生徒会にいたの」

「まあ、実行したのは生徒会としてではなく個人でだったけどね。」

「えっと、それは一体どういう事ですか？」

まあ、普通なら相手のアジトに乗り込むのに一人ではなく団体で乗り込むのが定石だろうが。

「えっと、それをしたのが私の前任の生徒会長の磯鷲会長なんだけどね。自分が計画した企画を非公式新聞部にめちやくちやにされてそれで怒った磯鷲会長が非公式新聞部の部室に乗り込もうとしたのよ」

「えっ?!部室の場所はわかってるんですか？」

音姉の言葉にムラサキが驚きの声をあげる、それもそうだろう、しかし。これは。

「あー、音姫言葉が足りないわよ。詳しく言うと部室に繋がってるであろう秘密の道よ。」

非公式新聞部はこの風見学園においては非公式の部活でありながら学園の創立当時から存在している、その為かこの学園の至る所に非公式新聞部の隠し通路が多く存在する。

かという俺は全くどこに在るのかどれだけ在るのかは知らない、知っているのは非公式新聞部のメンバーだけだ。

「でしたら尚更その通路を使うべきなのは？」

「いやー、私達も発見当時はそのつもりだったのよ。その為に準備を少しづつしてたんだけど・・・。」

「？」

急に齒切れが悪くなったまゆき先輩に対して疑問符を浮かべるムラサキ、その様子を見て音姉が口を開く。

「さっきも言った通り磯鷲会長が単独でその通路を使って行っちゃったの、下校時間が過ぎた後に。」

「ええ!!ど、どうしてその様な事を？」

「磯鷲会長って、どちらかというとな非公式新聞部よりの人だったのよ。けど、非公式新聞部とは対立してたの。」

「だけど、生徒会の他のメンバーに内緒で勝手にイベントを用意したりと生徒会の中でも問題児だったの。」

「え、ええ。生徒会長がですか？」

ムラサキが信じられない様な様子で音姉に問い掛ける、まあ。気持ちには分からなくない。磯鷲前会長は謂わば第三勢力の様な人だった。

生徒会に所属しながらも行動そのものは非公式新聞部寄り、しかし、誰よりも我が強く非公式新聞部とは相容れない間柄である。

「そんな人が自分の企画をおしやかにされて黙ってる訳なくってね、

私達が見つけたその隠し通路を使ったのよ。」

「な、なんて短絡的な……。それで結果は……。聞くまでもないですわね。」

流石のムラサキも呆れて物も言えない様だ、しかし。それも当然だろう。あの非公式新聞部の部室へと続くであろう重要な隠し通路を個人的な理由で無断で使用したのだから。

そしてその結果は現場が示す通り。

「そつ、現在も非公式新聞部は元気に活動中よ。まあ。けど幾つか収穫はあったけどね」

「収穫ですか？」

「ええ、磯鷲会長の話と同じ景色がずっと続いてる廊下で窓も扉もなかったそうなの。」

「進めど進めど同じ景色で流石に不味いと思ったらしんだけど時すでに遅しってやつでね」

「迷ってしまったのですね。」

「そうそう、んで迷ってどうしたらいいか分からずその場にしゃがみ込んでたら寝落ちしたらしくてさ」

「次に目が覚めたら学校の廊下だったらしいのよ。恐らくだけど非公式新聞部に見つかって外に連れ出されたんでしょうね」

「そうなのですか、まあ。無事でなによりでしたけど、その隠し通路は

？」

「後日調べたら見事に無くなってたのよ入り口が、仕事の早い事早い事。」

この話はかなり有名な話なのであの磯鷲会長がしばらくの間大人しくしていたぐらいである、相当怖かったのだろう。

「まあ。そんな事があって私達も迂闊に踏み込めなくなっちゃったって訳。入り口を見つけれても中がどうなってるか不明な以上安易に踏み入れ慣れないからね。」

「うん。また磯鷲会長の二の舞になりかねないしね。それに大勢で踏み行っても安全っていう保証もないしね。」

「成程そういう事でしたんですね、根本的な解決法が使えないのは厳しいですね。」

そんなこんなで対非公式新聞部対策会議は幕を閉じた、因みに夕飯は全員が家で食べていった。

また週末に買い物に行かないといけないな。

番外編

風見学園演劇部の名作 前編

「私はこの作品に負けないものを作りたいの、だからお願い皆んなの力を貸してほしいの。」

俺たちの目の前の少女、雪村 李【ゆきむら すもも】は頭を下げながらそう言った。

さて、どうしてこんな事態になったのかという時間を少し遡らなければならぬ。あれは昨日の放課後のことであった。

期末テストも終わり夏休みを目前に控え7月中旬に差し掛かりっており、クラス全体の空気が緩んでいる様に感じる。

目前に控えた夏休みをみんな今か今かと待ち構えて過ごしている。

俺。芳乃 清隆【よしの きよたか】はそんな中自身が所属する部活動に向かう為に支度をする、すると。

「兄さん」

「先輩」

二つの声に呼び止められる、声の方を向くとそこには二人の女子生徒がいた。俺と同じ部活に所属している幼馴染の葛木 姫乃【かつら

ぎ ひめの」と飛び級生である溜川 さら【るかわ さら】がそこに居た。

「兄さん、部活に行くのでしたらご一緒してもいいですか？」

「ああ、俺は良いぞ。さらはソフト部の方は大丈夫なのか？」

「あつ、はい。大丈夫です。」

さらは、俺たちが所属している部活の他にソフトボール部に所属している。ソフト部に所属するまでに色々な部活を見学したがサラの希望でソフトボール部に所属する事になった。

そろそろ向かうかと思ひ席を立つ、歩き出した俺を見て二人も俺の後に続き歩き出した。

廊下に出るとそこは多くの生徒で溢れていた、部活に行く者と帰る者。あるいはそれ以外の理由で。多くの生徒が廊下にいた。

この風見学園はイベントに事欠か無い学園だその為本島から態々編入してくる者もいるくらいだ、因みにさらも本島からやって来た編入生だが理由は違うのだがこれは言わなくても良いだろう。

生徒たちの波を掻い潜りながら部室に向かっていると聞き慣れた声で俺を呼び止めた。

「おーい、清隆」

「耕助」

後ろから聞こえた声の主は同じクラスの江戸川 耕助【えどがわ

こうすけ」だった。普段から女子にモテたいと公言する程でイベント時には他校の生徒をナンパしたりもしている。

まあ。だいたい姉の江戸川 四季【えどがわ しき】さんに見つかっては折檻されているのだが。

しかし、俺の記憶が正しければ耕助はHRが終わって最初の方に教室を出て行っていた筈だが、まさかまだ校舎に残っていたとは予想外だった。

「あつ、そうそう清隆たち公式新聞部に伝言があるんだ」

「伝言?」

「そうそう、雪村から頼まれたんだよ」

先程耕助の言った通り俺と姫乃とさらは公式新聞部に所属している、他にも後3人ほどいるのだが。

それよりも今は雪村からの伝言の方が先か。

「雪村はなんて?」

「ああ、ちよつと美琴を借りるってさ。だから立夏さんたちによろしく伝えといてくれてさ」

美琴、本来公式新聞部の部員では無いのだが先日行われた春季体育祭において行われたとある賭けに俺たち公式新聞部が勝利したため相手のとある部活から一時的に借り受けているのだ。

騒がしい奴だが決して悪い奴では無いし、公式新聞部に来てなんだ

かんだ言ってるが結構馴染んできている。

俺と会話する時だけ刺々しいのだが揶揄ったりすると、予想以上に良いリアクションをしてくれたりするので揶揄うと面白いやつなんだよな美琴って。

公式新聞部の面々も美琴のあの性格を把握しているので普通に接している。本人は否定するだろうが美琴も公式新聞部に馴染んでいくように見える。

その後耕助と別れた俺たちは公式新聞部の部室に向かう、部室が近付いていくと周りの音もなくなり始め最終的には外から運動部の掛け声のみとなる。

そして部室に到着する、部室の扉を開けるとそこには既に三人の部員が椅子に座っており俺たちを視界に捉えると。

「あら、三人とも今日は来れたのね」

「タカくん、姫乃ちゃん、さらちゃんいらつしやーい。丁度紅茶を淹れる所だったんだよ」

「皆さん、こんにちはです。」

一番に声をかけてきたのがこの部活の部長で、この公式新聞部の創部の立役者である森園 立夏【もりぞの りつか】さんである。

容姿端麗、成績優秀。そのうえ人望と人気も兼ね備えており側から見れば絵に描いたような高嶺の花という他ない。

親しくなった今でもその認識は変わらないが、意外にもツツコミ属

性も兼ね備えてたりもするのでとても親近感が湧く。

次に声をかけてきたのは芳乃 シャルル〔よしの〕俺の従姉妹で今現在は俺の暮らす団地で一緒に住んでいる。俺はるる姉と呼んでいる。

俺の事をタカくんと呼びどこでも構わずに俺の事を甘やかしてくる、立夏さんに負けず劣らずのスタイルの良さに加え人気者で立夏さんと同じく生徒会にも所属している。

これまた非のうちどころのない完璧超人に見られがちであるが、唯一料理だけが壊滅的に下手なのだ。掃除や洗濯、はては裁縫も完璧なのに。

初めて口にした時は走馬灯のようなものが見えた、しかもタチの悪い事になる姉自身はその料理を口にしてもケロツとしている為自覚が無いのが俺たち公式新聞部の悩みの種の一つだ。

最後は陽ノ下 葵〔ひのもと あおい〕ちゃん。年齢で言えばさりと同じ年なのだがさらには飛級生な為学年では一番下になる。

身体が弱く良く体調を崩し気味であるがそれを感じさせないくらい明るく元気な子であり、見てるこっちも元気をもらっている。

ただ幾つものバイトを掛け持ちしておりそれが体調を崩す一因にもなっているので少し心配である。

先ほど紹介した姫乃、さら。そして俺の六人が公式新聞部の全部員である。

挨拶もそこそこに全員が指定の席に座る、そのタイミングを見計

らってかかる姉が紅茶の入ったカップを置いていく。

全員に行き渡ったところで立夏さんが姿勢を正すと。

「みんな揃った訳だし会議の方を始めます、と言っても特に会議にするほどの事も無いので自由にお喋りでもしましょうか」

立夏さんがそう言うともみんな姿勢を崩す、夏休み特集の新聞は先日完成させて既に校舎の掲示板に貼っている、その為今現在我ら公式新聞部は急ぎの仕事などが無く放課後は予定が無ければ部室に集まって駄弁っている事が多い。

勿論予定があればそちらを優先している為実は全員がこうやって揃うのは最近では滅多になかったりする。

立夏さんやるる姉は生徒会、葵ちゃんはアルバイト。さらはソフトボール部、俺もさらと同じ様にソフトボール部のマネージャーとして参加する事も有る。姫乃はクラスメイトたちに誘われて遊びに行ったりなど。

最近では集まっても二、三人、多くても四人だったりする。

「最近皆んな変に忙しかったのよね、合宿の打ち合わせが終わった後で良かったわ」

「そうだね、ふふっ。今から楽しみだね」

「はい、楽しみです。皆さんとりよこ・・・んんっ。もとい合宿」

「葵ちゃん、もう無理に言い直さなくても良いと思いますよ。」

「あはは、でもやっぱり楽しみですね。こういった旅行前特有のわくわく感私は好きです」

「確かにな、このわくわく感は幾つになっても良いモンだな」

「清隆、なんかじじ臭いわよ」

そう、俺たち公式新聞部は夏休みが始まる初日の七月二十三日に合宿という名の旅行に行く事になっている。

泊まる予定の宿はさらの別荘となっている、一度行った事があるのだが。とても良いところであった、これがセレブかと思ってしまうほどに。

立夏さんの要望により借りれないかと相談した際に許可が下りた為今回ご厄介になる事になった。

勿論此処にはいないが美琴も参加する。なんだかんだ言っただけが雪村からのタレコミで楽しみにしているのは知っているし……。

「あつ、美琴。」

「……あつ！」

ここで美琴に関して雪村から伝言を預かっていた事を思い出す、さらと姫乃も忘れていた様で俺が名前を呟くと思いついた様だ。

「そうでした、すっかり美琴さんのこと忘れてました。」

「あら、美琴がどうかしたの？貴方達何も言わないからってつきり今日は来ないのかとおもったのだけだ。」

「あー、そのですね。」

俺たちは預かった伝言の内容をそのまま伝える、それを聞いた立夏さんたちは少し呆れた表情をしていた。

「全く、折角伝言を預かってたのに今の今まで忘れてたなんてちよつと気が緩みすぎてないかしら三人とも」

「二はい、すみませんでした。」

「まあまあ、立夏。三人とも反省してるみたいだし。ねっ?」

「はあ、まあ、いいわ。次からは気をつける事。良いわね三人とも」

るる姉の仲裁で立夏さんがそう言う、まあ。忘れた俺たちが全面的に悪いのは事実なのだから。

「けど驚きましたよ私は」

立夏さんのお説教も終わるのを見計らった様に葵ちゃんがそう言う。

「葵ちゃん。何が驚きなのでしょう?」

「さら先輩そんなの決まってますよ」

そうやって葵ちゃんは一呼吸おくと。

「あの美琴さんに清隆さんたち以外にお友達が居たなんて!!」

「それはどういう意味よ陽ノ下 葵!!」

葵ちゃんが言い終わるのとほぼ同時に部室の扉が開いたと思ったらそこには美琴の姿があった。

「ひゃあ!？」

「み、美琴さん?!いつから?」

「陽ノ下 葵が今さっきのセリフを言った時によ!!私が居ない間に好き勝手いつてくれたじゃないの!!」

「い、いや。だ、だつてホントに美琴さんが私達や杉並さん以外と一緒にいるところとか見た事ないですし……。」

「ガルルルルツツツ!!」

葵ちゃん言葉を聞き少々お冠な様子な美琴、流石に葵ちゃんにそろそろ助け船を出さないといけないだろう。

「ところで雪村の用事つてなんだつたんだ?」

ひとまず話題を逸らすために話を振ってみる、すると。

「ああ、その件ね。一応済んだけどまた頼み事をされたのよ。」

先程まで怒り狂っていた美琴が落ち着きやや取り戻し。そう言つて美琴は俺たちの顔を見渡す。

「あ、アンタたち明日の予定はあ、空いてるかしら?」

美琴が言葉に詰まりながら予想外の言葉を俺たちに投げかけてきた、まさか美琴に予定を聞かれるなんて事があるなんて。

「私は無いわ、他のみんなは？」

真つ先に答えたのは立夏さんであった、それに続いてみんなも予定がない旨を伝える。

それを聞いた美琴は。

「そ、そう。な、なら明日の十三時ごろにすももの家に来てほしいの」

「雪村の家にか？」

「ええ、詳しい話はすももが直接したいから私からは要件は言えないけど。」

「何の話かは当日のお楽しみって訳ね、所で清隆たちはその雪村さんの家の場所は知ってるの？」

「はい、俺は詳しい場所は知らないですけどさらと姫乃は行った事があつたよな」

「ええ、何度か」

「なら当日は私たちが雪村さんの家まで皆さんをご案内します、待ち合わせは何処がよろしいでしょうか？」

立夏さんの質問にさらと姫乃が答える、その過程でさらと姫乃が案内役を買って出てくれた。

その後待ち合わせの時間や場所もほとんど拍子に決まった、その様子を見届けた美琴は。

「決まったみたいね、それじゃ私は帰るわ」

「えっ、もう帰るんですか？」

「まだ来たばかりじゃないですか。」

さらに姫乃がそう言うが美琴は。

「すももの頼み事のせいでクタクタなのよ、此処に来たのも伝言を伝える為だし。それじゃ、明日絶対来なさいよ！来なかつたら私がすももに怒られるだから!!」

そう言つてすももは部室を後にした、俺たちはしばらく部室に残っていたがその後早々に解散した。

雪村が俺たちに何の用事があるのだろうか？その事を考えながら俺はるる姉と姫乃と共に帰路についた。

風見学園演劇部の名作 後編

翌日俺たち公式新聞部は全員揃って雪村の家に向かっていった、行き
の道中では何の用事であるかを皆んなで予想しながら歩いていった。

そしてそうこうしているうちに俺たちは雪村の家えとたどり着い
た。

「すげーな」

「うん、立派だねー。」

俺と隣に居たるる姉は呆然としながら雪村の家を見ていた、さらや
姫乃から話は聞いていたがこれ程とは予想していなかった。立派な
門にそこから石畳のから玄関に繋がっており旅館か？と思わず思っ
てしまった。

見事な日本家屋というやつだろう。

そんなさらと姫乃は何とも言えない表情で俺たちを見ていた、恐ら
く二人とも最初は俺たちと同じ様な感じだったのだろう。

「ほらほらみんな、玄関先でブーツとしてないで早く入るわよ」

いち早く立ち直った立夏さんが全員に言う、こういった所は流石と
しか言いようがない。

立夏さんに言われ俺たちはインターホンを鳴らす、少ししてイン
ターホンのスピーカーから。

『ほー』

俺たちを招いた雪村の声が聞こえて来る、それと僅かだが雪村以外の声も多少聞こえる。どうやら俺たち以外にも呼ばれた人たちが居るみたいだ。

「あつ、雪村さん姫乃です。」

『公式新聞部の皆さんね、ちよつと待ってて』

インターホン越しの雪村の声は途切れ、しばらくすると。石畳の先の玄関から一人の私服姿の女の子が出てきた、その女の子が今回俺たちをこの家に招待してきた雪村 すもも【ゆきむら すもも】である。

俺たちと同じクラスで美琴とは以前より交友関係にあつたらしく葵ちゃんほどではないが驚いたものだ。

「公式新聞部の皆さん今日は私の我儘を聞いていただき有難うございます。」

そう言つて雪村は頭を下げた、その様子に俺たちは驚くのと同時に雪村のお願い事は余程大事な事というのがわかった。

「取り敢えず頭を上げて雪村さん、詳しい話しを聞きたいから先ずは家に上げてもらつても良いかしら？」

こういった場面ではやはり立夏さんの復帰は早かった、頼りになるなホントに。

立夏さんの言葉で頭を上げ、俺たちは雪村の家に上がらせてもらう。そして玄関に入ると幾つか靴があつた、その中の二つはサイズが大きかったので恐らく男物のだろう。

「私たち以外にも声を掛けた人たちがいたみたいね。」

立夏さんも靴に気が付いたのか雪村に話しかけていた。その言葉を聞き他のメンバーもそういうえば、と言う。

「はい、私のお願い事の内容上。人手が必要で。それ以外にも理由があるんですけど今は。」

「そうね、他の人が待ってる部屋に行ってからね。お願いの内容を聞くのは」

「はい、皆んな居間に居るので。」

雪村の案内で俺たちは居間まで案内される、目的地に近づく程に聞き慣れた声が幾つも聞こえてきた。

「ねえ、兄さん。この声ってもしかして」

「ああ、間違いなくあのんだ。」

「で、ですよ。もしかして雪村さんの美琴さんへの用事って」

「そういう事だろうな」

俺と隣にいる姫乃とそんな会話をする、例の声を聞いた他の公式新聞部面々のリアクションはさまざまだ。

そうこうしていると雪村が居間の襖に手を掛け襖を開く、するとそこにはよそう通りの人物と予想外の人物たちが居た。

「はーはっはっは。遅かったな我が宿敵森園 立夏、そして同志芳乃よー!」

腕を組み仁王立ちをしながら此方に話しかけてきた彼の名は杉並。名前以外の事は殆どが謎に包まれている人物で俺たち公式新聞部とは一応ライバル関係にある。

その理由は杉並先輩の所属する部活が関係している、それは非公式新聞部。半世紀以上続くこの風見学園において学園創設時より続く非公式の部活である。

非公式の部活でありながら歴史は長く、学園のイベント時には必ず騒動を起こす問題児たちであり杉並先輩はその筆頭で一応美琴も非公式新聞部所属だ。

生徒会に所属しつつ公式新聞部部长である立夏さんとは事あるごとに対立している。

後何故か俺の事を同志と言い目を付けられている、美琴が公式新聞部に一時的に所属する事になった原因も杉並先輩が俺を非公式新聞部に引き抜こうとしたからである。

そんな問題児の筆頭である杉並先輩が雪村の家に呼ばれているという事は雪村の頼み事がなんなのか俺は予測できない。

そしてそんな杉並先輩の傍には美琴が座っていた、それから。

「皆様、こんにちは」

「おー清隆たちも来たんだな」

「あんた達遅いわよ」

「耕助に四季さん、二人も呼ばれてたんだな。それに美琴も居るんだな」

江戸川 四季「えどがわ しき」さん。耕助の実の姉で立夏さんやるる姉とは同級生で風紀委員である。

俺はあまり話した事は無いのだが耕助曰くかなりの毒舌家であるそうだ、耕助は四季さんの話しになると必ずこう言っている。

『家での毒舌はヤバいんだよ、外じゃセーブしてんだよ姉貴は。』

との事だ、俺はあまり四季さんのそういうった場面に出くわさないの
で立夏さんやるる姉にこの話をする。

『そう・・・あれで抑えてるのね。』

『あれでなんどく。』

思い当たる事があるのか終始微妙な反応だった、取り敢えず耕助の
言っている事はあながち嘘では無いという事は確かな様だ。

そんな事もあり俺の中では四季さんは侮れない人という認識であ
る、そんな人物まで呼ぶとは雪村のお願いとは？

雪村の案内で全員が思い思いの場所に座る、公式新聞部の面々は誰
が俺の両隣に座るかで少し揉めた。

その様子を見て耕助が『この幸セレブ野郎が!!』といつぞやの様に
憤慨していたが四季さんによって鎮められていた。

それに面白がって杉並先輩も立候補してきた時は当然の様に遠慮した、しかし、その様子を見ていた葵ちゃんと美琴の視線が何か期待に満ちていたのは気のせいだと思う。

結局ジャンケンの結果俺の両隣は右が立夏さん、左が姫乃になった。俺の正面には美琴、杉並先輩、耕助。耕助の右隣には四季さんと雪村が。

姫乃の左にはさらとる姉、そして葵ちゃんが座っている。全員が座ったのを確認すると徐に雪村が話し始めた。

「みんな、今日は集まってくれて有難うございます。今回みんなに集まってもらったのは私作の演劇部の作品に実演して欲しいという実演依頼です。」

雪村の言葉を聞き俺を含めた殆どの人は驚きの声をあげるが数名だけ動じていなかった。立夏さんと杉並先輩、あと美琴。

「私の作品は来年の卒パで上映の予定です、期間は長い様で短くもありません。」

「けど、私は私の目標の為にできる事は全部やりたいんです。」

「その最初の努力がキャスティング。私達に対しての実演交渉って訳ね。」

雪村の話しに立夏さんが反応する、普段の雪村を知ってる俺たちからすると今の雪村の様子は真剣そのものだ。何が雪村をこれまで真剣にさせるのか。

「私には成し遂げたい事があります、私は私を育ててくれた杏さんの作品を越える作品を作りたいの。」

杏さん、本名は雪村 杏さん。雪村の里親で職業は確か作家さんだった筈。彼女の名前は知らなかったが作品は知っている、4人の悪童というシリーズ作品だった筈だ。

「そういえば、雪村さんのお母さんは確か風見学園のOBなんでしたっけ？」

「ええ。そうよ。20年前の卒業生で生徒会長も勤めてたそうよ。」

「そうなんですか、生徒会長だったという事はとても優秀な方だったのですね。」

「くくくつ、それだけでは無いぞ。その当時の生徒会には元非公式新聞部のとあるお方も居られたのだぞ。」

杉並先輩の言葉に全員が驚きの声を上げる、まさか生徒会に敵対組織である非公式新聞部のメンバーが居たとは。

「はいはい、話が脱線し始めてるわよ。雪村さん話の続きを。」

「ああ、はい。」

立夏さんのフォローで話が元の話題に戻った、杉並先輩の言葉は気になるが今は雪村の話が優先だ。

「杏さんは演劇部に所属していて私同様に付属三年の卒パでシナリオと監督を務めたの。」

「そうだったんだ。どんな作品なの？」

「えっと、スレイプニルバレー殺人事件です。」

「ミステリーものだったんですか。という事は雪村さんもミステリーを？」

「いや、雪村杏嬢は恋愛ものやコメディ色の強い作品も手掛けていた筈だ。雪村すもも嬢もそれは知っているだろう。」

「へえー、色々やってたんだな。因みに作品のタイトルはなんて言うんだ？俺たちでも知ってる作品？」

「恐らくは一度は耳にした事はある筈だ。真夏の卒業式と怪盗プリンセス・雪月花を狙え。というタイトルだ。」

杉並先輩の答えに俺は頭にはてなを浮かべるが周りはどうもそうでは無いみたいで。

「えっ！そんなんですか。真夏の卒業式演劇部の部活見学で見ました。」

「私も見ました、あれ雪村さんのお母さんの作品だったんですね。」

「俺も俺も、めっちゃ感動した」

「そうですね、ボロボロに泣き崩れて演劇部の人に対応に困るくらいには感動してましたね愚弟？」

「うぐっ……。」

四季さんの指摘に耕助が吃る、耕助の例は異常だが姫乃やさらの反応を見る限りでは良い作品だったのだろう。

「外観を見た時から思ってたんだけど怪盗プリンセスが忍び込もうとした屋敷つてもしかしてこの家かな？」

「はい、そうです。」

「やっぱりそうだったんだ。」

「シャルルさん怪盗プリンセス見た事あるんですね、私プリンセスと旦那さん役の人との新婚さんのなやり取りが凄く羨ましいと思って見てました。」

「あつ！私も憧れるよねあのやり取り。今度タカくんに頼んでやってもらおうかな。」

「あー、シャルルさん狡いです私も清隆さんにしてもらいたいです!!」

るる姉と葵ちゃんは何やらよくわからない会話で盛り上がった、というか怪盗なのになんで新婚というワードが出てくるのだろうか？謎だ。

「二先ず、全員静かに。雪村さんの話がまだ途中よ。」

立夏さんの言葉でまた場が静まる、そして雪村が話し始める。

「杏さんの作品はどれもとても完成度も高くて面白い作品ばかりです、けど私が勝ちたいと思ってる作品は先ほど挙げた中にはありません。」

雪村の言葉に少し騒めきが起こる、しかし、杉並先輩と立夏さん。そして美琴は黙っていた。

立夏さんや杉並先輩はともかくあの美琴がここまで大人しいというか静かなのを見るときもしかすると美琴は幸村が言う杏さんの作品に心当たりがあるのかもしれない。

「となると、やっぱりあの噂の作品なのかしら。」

「ほう、流石俺のライバル森園立夏だ。かの作品の事を知っていたか。」

「まあね、以前枯れない桜のことを調べてた時に偶然知っただけだね。」

「立夏さん。その作品って？」

「まあ、まて同志芳乃。ここはこの俺が件の作品について語ろうではないか。」

杉並先輩が何処か嬉々とした表情を浮かべながらそうやってきた。杉並先輩にしては珍しく興奮しているように見える。

「そう言うのは当人の雪村さんがするべきじゃ無いのかしら？」

「ああ、いえ。森園先輩気にしないで下さい。恐らくですけど私より杉並先輩の方が詳しいと思うので」

「雪村嬢の許可も降りた、ならばこの杉並皆に懇切丁寧に教えしよ。」

そう言つて杉並先輩は立ち上がると態とらしく咳払いを一つすると語り始めた。

「諸君、我が風見学園演劇部には実しやかに語られる噂があるのをご存知か？」

杉並の問いかけに立夏さんや雪村を除いた面々はハテナを浮かべる、どうやらみんなも知らない様だ。

「こほん、風見学園演劇部には幻と言われる名作がある。そしてその名作の監督。そしてシナリオを考えたのが雪村杏嬢と言われている。」

「更にはキャスティングも豪華で当時の風見学園生で知らぬ物など殆どいないと言つていい程の豪華な面々が揃っていた。」

「当然噂を聞きつけた生徒たちはこれでもかと期待をしていた、そして。上映した結果は大・大・大成功と言える結果を残したのだ」

杉並先輩が態とらしくオーバーな動きをしながら話す、話を聞いた限りでは何故その作品が幻と言われているのか分からないな。

「しかあし、問題はここからだつた。雪村杏嬢達が卒業し数年後その作品を見た一人の人物が風見学園に入学したのだ。」

「その人物は演劇部に赴き、件の作品をもう一度見せて欲しいと頼んだのだ。」

「その時の演劇部員たちも雪村杏嬢の事は知っていたらしく直ぐに撮影した作品の保管場所に向かい雪村杏嬢の作品を出してきた。」

「しかし、頼んできた人物は作品の内容をある程度しか記憶に残っておらずタイトルも覚えていなかった。その為態々雪村杏嬢の作品の冒頭部分だけ全て見るようになったのだ。」

「だが此処で問題が起きたのだ、見た作品がどれも自分の記憶に残っている作品とは違ったのだ。」

その後杉並先輩は延々と態とらしい演技を繰り返しながら話した、長かったので要約すると目的の作品が見つからず映像研も搜索しても空振りに終わり。

そして、OBに連絡すると何代か前の卒業生から探している作品を見た事があるとの情報を手に入れるも結局は見つからず収穫は実在するという事実のみ。

それが校内中に知れ渡りいつしか誰が言ったかは不明だが風見学園演劇部幻の名作と呼ばれる様になったそう。幻というか、失われたの方がしっくりくるが。

話が終わり誰もが口を噤む、沈黙を破ったのは。

「あのおく無くなって見るこの出来ない作品をどうやったら超えたことになるんですか？」

葵ちゃんが皆んなの心境を代弁するかの様に言う、それはそう。見ることの出来ない物をどう超えるのか。そして誰が超えたと判断するのか。

そんな俺たちだったが。

「大丈夫よ葵、作品はちゃんとあるわ。そうよね雪村さん？」

立夏さんが確信めいた顔を雪村に向ける、その視線を受けて雪村は。

「はい、これがその杏さんの作品よ。」

ポケットからケースに入った一枚のDVDを取り出した、表面の白い面には作品のタイトルと思われる文字が書かれていた。

「ええっ!!無くなったんじゃないんですか?!」

雪村の手にあるDVDを見て葵ちゃんが叫ぶ、他の面々も似た様な反応であったが。

「葵。その言葉は語弊があるわね。杏さんの作品は無くなってなんてなかったのよ。」

立夏さんの言葉に全員が首を傾げる、先程の杉並先輩の話を聞くと杏さんの作品は無くなっていた筈。なのにその無くなったはずの作品を雪村は持っている。それよりも無くなってなかったとは？

「杉並の言っていた話は本当の話よ、けどそれはちゃんと調べてたら話の様にはならなかったのよ」

「どういう事ですか?」

「まあ、簡潔に言っちゃうとこの作品は演劇部としての作品ではなく雪村杏さん個人の作品という事よ。」

立夏さんの言葉を聞き俺と姫乃、さらになる姉そして四季さんが「ああ」と声を上げる。確かにちゃんと調べればわかったことだ、しか

し。

「えっ?えっ?どういう事ですか?皆さんだけで納得してないで教えてくださいよ」

「そうだけ、俺たちだけ置いてけぼりにして。ちゃんと説明してくれよ。」

わかっていないのが二名ほどいた。俺たちは苦笑いを浮かべて二人を見た。

「いいですか、葵ちゃん。江戸川君。元々あの作品は個人出展の作品なんですよ。」

「個人出展?」

「はい、部活動なんかの活動とは別に個人で何か出し物をする事は生徒会の許可を得ることができれば個人で出展する事が出来るんです。」

「そう、さらの言う通りよ。当時の資料を見ると雪村杏さんは個人出展の形でこの作品を上映していたの。」

「ええっと、つまり演劇部として作品を作ったわけでは無いから演劇部には無くて当然って事ですか!!」

「はい、その通りです」

さらに立夏さんの説明で葵ちゃんが答える。それを聞いてようやく耕助も理解した様だった。

恐らくだけど杏さんが演劇部に所属していた事が原因でこの作品も演劇部としての作品だと思われたんだろう。

「そんで、その作品のタイトルってなんなんだ？」

俺がそう問いかけると雪村が答える。

「ええ。この作品のタイトルは……。」

『コードギアス 反逆の皇子』